

# 源氏諸流の研究

## ——参議以上の顯官についての検究

野口武司

一

平安朝の貴族政治に特異な地位を占めるものに源氏諸流がある。この先蹤ともいえる嵯峨源氏をはじめ、その後陸続として登場する源氏諸流については、すでに林陸朗氏の精細な研究（『嵯峨源氏の研究』「賜姓源氏の成立事」が有り、これにより、それらの成立事情や史的意義が詳説されていて、政治史・文化史などにおける地位が明確に跡づけられている。そこで本稿では、こうした先学の貴重な業績に導かれつつ源氏諸流について、弘仁五（八一四）年五月八日に嵯峨天皇の己が皇子・皇女への賜姓の詔が発せられ（『類聚三代格』一七所収）、しかしてその後を承けて、天長八（八三二）年七月一日に同天皇皇子信が参議に補されてより此の方、建久三（一一九二）年七月一二日に源頼朝が征夷大將軍に任ぜられるまでの三六二年間に、参議以上の顯官（以下、これを参議以上者と仮称する。）に補された多くの諸氏の人々の中にあつて、源氏諸流のそれがそれぞれ如何なる地位とそれに伴う威勢とを保有してきたか、また、その存在のあり様が如何なるものであつたかを諸種の面から究明してみようと思う。

まず、上記三六二年間における参議以上者の員数を氏族別・年次別に調査した結果を示す末尾付載表(一)に拠り、各年毎の参議以上者数の増減状態をメルクマールとして件の期間をば以下のように第一期、第六期と六区分しうるので、これら各区分についての事柄を叙説することからはじめよう。

**第一期** 天長八(八三二)年から天慶九(九四六)年までの二一六年間がこれに該当し、当該期間における各年毎の参議以上者は、一五名までを原則とする。ただし、これにあてはまらないのが天長一〇(八三三)年、一六名、承和元(八三四)年、一六名、同七(八四〇)年、一六名、貞観一四(八七二)年、一七名、元慶八(八八四)年、一六名、仁和二(八八六)年、一六名、同三(八八七)年、一六名、寛平七(八九五)年、一七名、昌泰三(九〇〇)年、一六名、延長八(九三〇)年、一六名、天慶二(九三九)年、一六名、同四(九四二)年、一七名、同八(九四五)年、一六名、の一三年間であり、これら各年次における件の員数は、それぞれ△▽内に示した通りである(後述の第五期・第六期)。そしてこれらのいわば例外年次を含めた第一期全体の年平均員数は一三・九四名、約一四名である。

**第二期** 天曆元(九四七)年から寛和元(九八五)年までの三九年間がこれに該当し、当該期間における各年毎の参議以上者は、一六名から二〇名までに限られている。この間の年平均員数は一七・〇二名、約一七名である。

**第三期** 寛和二(九八六)年から長徳元(九九五)年までの一〇年間がこれに該当し、当該期間における各年毎の参議以上者は、二〇名以上を原則とする。この期間中、それが最も多いのは二四名(正暦三(九九二)・長徳元(九九五)の兩年)、最も少ないのは二二名(永延元(九八七)年)で、年平均員数は二二・五〇名、約二三名である。

**第四期** 長徳二(九九六)年から寛弘四(一〇〇七)年までの一二年間がこれに該当し、当該期間における各年毎の

参議以上者は、一六名から一九名までに限られており、その間の年平均員数は一七・四二名、約一七名である。この数値は、上記第二期におけるそれよりも若干上廻るものの、ほぼそれに近似する。

**第五期** 寛弘五（一〇〇八）年から久安六（一二五〇）年までの一四三年間がこれに該当し、当該期間における各年毎の参議以上者は、二〇名から二五名までを原則とする。ただし、これにあてはまらないのが康平四（一〇六一）年（二七名）、同七（一〇六四）年（二六名）、治暦四（一〇六八）年（二七名）、永保元（一〇七四）年（二六名）、同二（一〇七五）年（二七名）、承暦四（一〇八〇）年（二七名）、永保二（一〇八二）年（二六名）、寛治二（一〇八八）年（二六名）、嘉保元（一〇九四）年（二七名）、嘉承元（一一〇六）年（二六名）、永久三（一一一五）年（二六名）、保安三（一二二二）年（二六名）、大治四（一二二九）年（一九名）、長承三（一二三四）年（二六名）、保延二（一二三六）年（二八名）、同四（一二三八）年（二七名）、永治元（一二四二）年（二六名）の一七年間である。そしてこれらの中にあつて、ことに大治四（一二二九）年の一九名の場合のみは、上記第二期ないし第四期に属する事例に同類と見做しえよう。これらのいわば例外事例を含めた第五期全体の年平均員数は二三・四九名、約二四名である。この数値は、上記第三期におけるそれよりも若干上廻るものの、ほぼそれに近似する。

**第六期** 仁平元（一二五二）年から建久三（一二九二）年までの四二年間がこれに該当し、当該期間における各年毎の参議以上者は、二六名以上を原則とし、その例外は久寿二（一二五五）年（二三名）、応保二（一二六二）年（二五名）、長寛元（一二六三）年（二五名）、治承四（一二八〇）年（二五名）の四年間である。そして保元元（一二五六）年（三一名）には、はじめて三〇名を数えるに至り、とくに承安四（一二七四）年（三二名）以降においては、そうした状態がほぼ連続して認められる。こうしたことから当該全期間における年平均員数は二九・一六名、約二九名にも達している。

以上のような各年毎にみる参議以上者の員数の増減状態に基づく分類区分により、それら全六期に及ぶ通算三六二年

間のうち、第三期相当の寛和二（九八六）年から長徳元（九九五）年までの僅々一〇年間を除いて考慮するならば、全体的には年所の経過とともにその員数が次第に増大化している事実を明確に裏付けしうるのである。そしてその第三期相当の一〇年間というのは、一条天皇の治世下にあつて藤原頼忠（寛和二（九八六）年）・藤原兼家（永延元（九八七）年）（正暦元（九九〇）年）・藤原道隆（正暦二（九九一）年）長徳元（九九五）年）三者をそれぞれ廟堂の首班者とする時期なのであり、この期間に限り上述した現象——時所の経過とともに参議以上者の員数が次第に増大化しているという現象——に矛盾を招致せしめているが、ここでは、その期間中に、たとえそれが短い期間であるにしても、参議以上者が史上はじめて二〇名を超すに至ったことと、藤原道隆とその同母弟道長の、

#### 〈道隆〉

寛和元（九八五）年 非参議・中宮権大夫 従三位

寛和二（九八六）年 権中納言（不経参議） 従三位

権大納言（上首五人） 正三位↓従二位（上首同前）（一ヶ月三ヶ度加級例し）

永祚元（九八九）年 内大臣 正二位

正暦元（九九〇）年 摂政・関白・氏長者 正二位

#### 〈道長〉

寛和二（九八六）年 藏人・少納言 従五位下↓従四位下

永延元（九八七）年 讃岐権守・備前権守・左京大夫 従四位上↓従三位

永延二（九八八）年 権中納言（不経参議） 従三位

正暦二（九九一）年 権大納言（超四人） 正三位

長徳元（九九五）年 右大臣・内覧・氏長者 従二位

という官位・官職面での目覚ましい昇叙超任が認められることを指摘するに止めておこう。

### 三

参議以上者の、各年毎の氏族員数につき、それが原則として六氏族以上の場合をa、四ないし五氏族の場合をb、三氏族以下の場合をcとそれぞれ仮称するとともに、そのあり様を調査対象全期間たる天長八（八三二）年から建久三（一一九二）年までの三六二年間に亘って吟味検討してみると、およそつぎのようになる。

**イ期** 天長八（八三二）年から元慶元（八七七）年までの四七年間をイ期（<sup>a</sup>）と区分した場合、このイ期（<sup>a</sup>）にあつて、貞観一〇（八六八）年、同一一（八六九）年、同一三（八七二）年の三年間を除く四四年間は、すべて六氏族以上であり、上記のいわば例外的な三年間は各五氏族である。件のイ期全体における年平均氏族数は六・八五、約七氏族である。

**ロ期** 元慶二（八七八）年から仁和三（八八七）年までの一〇年間をロ期（<sup>b</sup>）と区分した場合、このロ期（<sup>b</sup>）にあつては、いずれの年次もそれぞれ四ないし五氏族から成っていて、その例外を全く認めえない。件のロ期（<sup>b</sup>）における年平均氏族数は四・三〇、約四氏族である。

**ハ期** 仁和四（八八八）年から寛平八（八九六）年までの九年間をハ期（<sup>c</sup>）と区分した場合、このハ期（<sup>c</sup>）にあつては、寛平三（八九二）、同四（八九二）の二年間が二氏族、他余の七年間が各三氏族からそれぞれ成っているの、その例外を全く認めえない。件のハ期（<sup>c</sup>）における年平均氏族数は二・七七、約三氏族である。

二期 寛平九（八九七）年から延喜元（九〇二）年までの五年間を二期（<sup>2</sup>b）と区分した場合、この二期（<sup>2</sup>b）にあつては、三年間が四氏族、二年間が五氏族からそれぞれ成っているので、その例外を全く認めえない。件の二期（<sup>2</sup>b）における年平均氏族数は四・四〇、約四氏族である。

ホ期 延喜二（九〇二）年から同九（九〇九）年までの八年間をホ期（<sup>2</sup>a）と区分した場合、このホ期（<sup>2</sup>a）にあつては、いずれの年次もすべて六氏族から成っているので、その例外を全く認めえない。むろん件のホ期（<sup>2</sup>a）における年平均氏族数も六・〇〇、六氏族ということになる。

ヘ期 延喜一〇（九一〇）年から同二〇（九二〇）年までの一一年間をヘ期（<sup>3</sup>b）と区分した場合、このヘ期（<sup>3</sup>b）にあつては、八年間が四氏族、三年間が五氏族からそれぞれ成っているので、その例外を全く認めえない。件のヘ期（<sup>3</sup>b）における年平均氏族数は四・二七、約四氏族である。

ト期 延喜二一（九二二）年から延長四（九二六）年までの六年間をト期（<sup>2</sup>c）と区分した場合、このト期（<sup>2</sup>c）にあつては、一年間（<sup>延長四（九二六）年</sup>）が二氏族、五年間が三氏族からそれぞれ成っているので、その例外を全く認めえない。件のト期（<sup>2</sup>c）における年平均氏族数は二・八三、約三氏族である。

チ期 延長五（九二七）年から天慶四（九四二）年までの一五年間をチ期（<sup>4</sup>b）と区分した場合、このチ期（<sup>4</sup>b）にあつては、九年間が四氏族、五年間が五氏族、一年間（<sup>天慶二（九二九）年</sup>）が六氏族からそれぞれ成っているので、この一年間の六氏族のみが例外ということになる。件のチ期（<sup>4</sup>b）における年平均氏族数は四・四六、約四氏族である。

リ期 天慶五（九四二）年から同九（九四六）年までの五年間をリ期（<sup>3</sup>c）と区分した場合、このリ期（<sup>3</sup>c）にあつては、各年すべて三氏族となっているので、その例外を全く認めえず、また、件のリ期（<sup>3</sup>c）における年平均氏族数も三・〇〇、三氏族となる。



同九《九四六》年の五年間、年平均氏族数三・〇〇、三氏族。↓ヌ期（<sup>5</sup>b）△天曆元《九四七》年、康保四《九六七》年の二年間、年平均氏族数四・六二、約五氏族。↓ル期（<sup>4</sup>c）△長徳元《九九五》年の二年間、年平均氏族数二・六一、約三氏族。↓ヲ期（<sup>6</sup>b）△長徳二《九九六》年、寛弘二《一〇〇五》年の一年間、年平均氏族数四・〇〇、四氏族。↓ワ期（<sup>5</sup>c）△寛弘三《一〇〇六》年、建久三《一一九二》年の一八七年間、年平均氏族数二・三五、約二氏族。▽

これにより、最初のイ期（<sup>1</sup>a）から最後のワ期（<sup>5</sup>c）までの各期における年平均氏族数の増減状態は、イ期（<sup>1</sup>a）からハ期（<sup>1</sup>c）まで減少するが、このハ期（<sup>1</sup>c）からホ期（<sup>2</sup>a）まで増大し、このホ期（<sup>2</sup>a）からト期（<sup>2</sup>c）まで減少するが、このト期（<sup>2</sup>c）からチ期（<sup>4</sup>b）へと再び増大し、爾後、そのチ期（<sup>4</sup>b）からリ期（<sup>3</sup>c）へと減少し、このリ期（<sup>3</sup>c）からヌ期（<sup>5</sup>b）へと増大し、このヌ期（<sup>5</sup>b）からル期（<sup>4</sup>c）へと減少し、このル期（<sup>4</sup>c）からヲ期（<sup>6</sup>b）へと増大し、そしてこのヲ期（<sup>6</sup>b）から最後のワ期（<sup>5</sup>c）へと減少するというように、減少と増大の両時期を交互に反覆しつつ推移している事実を指摘しうる。さらにこうしたことから、それら減少と増大の両時期をサイクルと観て、この一サイクルを四度ほど繰り返して、五度目のサイクルにおける減少期が最後のヲ期（<sup>6</sup>b）からワ期（<sup>5</sup>c）までに相当すること。そして件の五度目のサイクルにおける減少期が、それ以前に認められる四度のそれと比べて、その度合において最も顕著、かつ徹底しており、しかも長期に亘っていること、等を認知しうるのである。さらにこうした事柄は、c、つまり各年平均三氏族以下のうち、とりわけ各年平均二氏族の事例が、そのワ期（<sup>5</sup>c）以前、すなわちイ期（<sup>1</sup>a）の最初年たる天長八（八三二）年からヲ期（<sup>6</sup>b）の最終年たる寛弘二（一〇〇五）年までの一七五年にあつては、

寛平三（八九二）年  
↓ハ期（<sup>1</sup>c）における二年間連続  
寛平四（八九二）年

延長四（九二六）年 ↓ト期（<sup>2</sup>c）における一年間のみ



天延元(九七三)年	↓ル期 <sup>(4)</sup> <sub>(c)</sub> における八年間連続
天延二(九七四)年	
天延三(九七五)年	
貞元元(九七六)年	
貞元二(九七七)年	
天元元(九七八)年	↓ル期 <sup>(4)</sup> <sub>(c)</sub> における四年間連続
天元二(九七九)年	
天元三(九八〇)年	
永延二(九八八)年	
永祚元(九八九)年	
正暦元(九九〇)年	↓ル期 <sup>(4)</sup> <sub>(c)</sub> における四年間連続
正暦二(九九二)年	

と所見されるのに対して、件のワ期<sup>(5)</sup><sub>(c)</sub>にあつては、寛仁元(一〇一七)年から寛治元(一〇八七)年までの七一年間、嘉承二(一一〇七)年から保延元(一一三五)年までの二九年間、久安二(一一四六)年から平治元(一一五九)年までの一四年間にそれぞれ連続して所見されるという一事に徴してもよく理會され、確認されるのである。

かくして参議以上者の、各年毎における氏族員数のあり様につき、その減少・増大の状態を天長八(八三二)年から建久三(一一九二)年までの三六二年間に亘つて眺めてみた場合に、その最初のイ期<sup>(1)</sup><sub>(a)</sub>における状態から、減少と増大の兩期間を併せての一サイクルを四度ほど繰り返して、最後のワ期<sup>(5)</sup><sub>(c)</sub>における寛弘三(一〇〇六)年からの五

度目の減少期に入り、爾後、こうした減少状態が建久三（一一九二）年まで連続するとみてよいこと。そうした一サイクル単位において、減少期には  $a \begin{pmatrix} 1 \\ a_2 \end{pmatrix} a \rightarrow b \begin{pmatrix} 1 \\ b_3 \end{pmatrix} b \rightarrow c \begin{pmatrix} 1 \\ c_2 \end{pmatrix} c$  という推移ケースはありえても、 $a \begin{pmatrix} 1 \\ a_2 \end{pmatrix} a \rightarrow c \begin{pmatrix} 1 \\ c_2 \end{pmatrix} c$  という推移ケースは決してありえないこと。また、逆に増大期には  $c \begin{pmatrix} 1 \\ c \end{pmatrix} \rightarrow b \begin{pmatrix} 2 \\ b \end{pmatrix} \rightarrow a \begin{pmatrix} 2 \\ a \end{pmatrix}$  という推移ケースはありえても、 $c \begin{pmatrix} 1 \\ c \end{pmatrix} \rightarrow a \begin{pmatrix} 2 \\ a \end{pmatrix}$  という推移ケースは決してありえないこと。減少・増大の両期間を併せた一サイクル単位の三サイクル目からは  $a$  が存在しなくなる。年平均氏族数の少ない  $c$  のうち、その最も顕著にして徹底した状態がワ期（ $c$ ）の寛弘三（一〇〇六）年以降において、それも一八七年間という長期間（調査対象の三六二年間の約五四%をも占める）において認められること、等々から判じて、件の減少・増大の両期間を併せた一サイクルの反覆現象は、その内実如何についての追求をば、微視的なし局部的に試みる限りにおいては往々にして単に不規則性を以て展開されているかに捉えられがちであるが、巨視的なし大局的に試みるならば、時所の推移とともに漸次減少化の傾向にあるといった一定の規則性を以て展開されている事実を確認しうるのであり、そしてそれが最も徹底した形で具象的に詮示されているのが、上述したワ期（ $c$ ）に属する寛仁元（一〇一七）年から寛治元（一〇八七）年までの七一年間をはじめとして、それ以降にも所見されるところの、年平均二氏族の時期ということになるのである。

#### 四

ところで、天長八（八三二）年から建久三（一一九二）年までの三六二年間に参議以上者を輩出した氏族数は都合二二を数えるが、いま、それら諸氏族を補任年次順（登場順）に随って列記するとともに、その登場の初出年次・後出年次・時期・延年数・延員数、等の仔細を分かり易くまとめて示すと表一のようになる（登場時期は、各世紀の前半・後半に分ちてそれぞれ該当する箇所にも〇印を以て示す。）。

表1

氏族名	登場初出年次	登場後出年次	登 場 時 期						登場延年数	登場延員数
1 藤原	天長八(八三二)	建久三(一一九二)	○	○	○	○	○	○	三六二	四八四八
2 清原	天長八(八三二)	貞觀三(八六一)	○	○					一〇	一四
3 皇親	天長八(八三二)	延喜一六(九一六)	○	○	○				四〇	四〇
4 南淵	天長八(八三二)	元慶元(八七七)	○	○					一七	一七
5 三原	天長八(八三二)	承和一〇(八四三)	○						一三	一三
6 文室	天長八(八三二)	承和九(八四二)	○						一二	一二
7 源	天長八(八三二)	建久三(一一九二)	○	○		○	○	○	三六二	一八一七
8 橘	天長一〇(八三三)	永觀元(九八三)	○	○	○	○	○		七九	八五
9 朝野	天長一〇(八三三)	承和一〇(八四三)	○						一一	一一
10 紀	承和二(八三五)	天慶二(九三九)	○		○				一九	一九
11 安倍	承和五(八三八)	貞觀元(八五九)	○	○					二三	二三
12 和氣	承和七(八四〇)	承和二三(八四六)	○						七	七
13 滋野	承和九(八四二)	仁寿二(八五二)	○	○					一一	一一
14 小野	承和一四(八四七)	康保四(九六七)	○	○	○	○			二七	二七

15 大伴	嘉祥元(八四八)	天曆四(九五〇)	〇	〇	〇	〇	〇	三二	三二
16 平	仁寿元(八五二)	建久三(一一九二)	〇	〇	〇	〇	〇	一〇二	一九〇
17 春澄	貞観二(八六〇)	貞観一二(八七〇)	〇	〇	〇	〇	〇	一一	一一
18 大江	貞観六(八六四)	嘉承元(一一〇六)	〇	〇	〇	〇	〇	五四	五九
19 在原	貞観一二(八七〇)	延喜一〇(九一〇)	〇	〇	〇	〇	〇	二九	二九
20 菅原	貞観一四(八七二)	寛弘五(一一〇八)	〇	〇	〇	〇	〇	三一	三一
21 良峰	延喜一七(九一七)	延喜二〇(九二〇)	〇	〇	〇	〇	〇	四	四
22 三善	延喜一七(九一七)	延喜一八(九一八)	〇	〇	〇	〇	〇	二	二

これにより、11-22の諸氏族がそれぞれ参議以上の顯官(以下、これを顯官と略称する。)をはじめて台閣に送り出す時期(以下、これを「登場時期」と略称する。)と、それをなさなくなる時期(以下、これを「不登場時期」と略称する。)とがそれぞれ何時であり、また、それら諸氏族が顯官として登場する延年数や延員数がそれぞれ如何ほどであるか、等といった事柄についてよく知りうるのである。

まず、これら諸氏族の「登場時期」についてみると、11-20の二〇氏族が九世紀(このうち11-15の一五氏族がその前半、16-20の五氏族がその後半。)、

21-22の二氏族が一〇世紀(西氏族ともその前半)である。それではそれら諸氏族の「不登場時期」は何時かというに、24569

11121317の九氏族は九世紀(このうち半数近く当たる5、6912の四氏族がその前半)、38101415192122の八氏族は一〇世紀(このうち半数以上に当たる3、10152122の五氏族がその前半)、

20の一氏族は一一世紀(その前半)、18の一氏族は一二世紀(その前半)という具合である。つまり、それら全三二氏族中、九氏

族が九世紀(その前半に五氏族、その後半に四氏族。)、八氏族が一〇世紀(その前半に五氏族、その後半に三氏族。)、一氏族が一一世紀(その前半)、一氏族が一二世紀(その前半)にそれぞれ登場しなくなっており、ことに九・一〇両世紀において、それら全三二氏族中一七氏族(約七七%)

にそれぞれ登場しなくなっており、ことに九・一〇両世紀において、それら全三二氏族中一七氏族(約七七%)

までが、そうした状態となっているのである。

以上のことから、それら二二氏族の「登場時期」「不登場時期」双方について最も大きな画期をなすのは、前者の場合、九世紀、とりわけその前半であるのに対して、後者の場合、九・一〇両世紀全般であるというように、後者の方が前者に比してその画期がより長期に及んでいること。そしてこのことと関わって、爾後、一一・一二両世紀に至ってなお、後者についての事象が従前に較べてより微少化したとはいえ、継続して認められ、ついに一二世紀の後半段階において顯官を輩出するのは、藤原・源・平三氏族に限られるに至っていること、等を確認しうるのである。

このように藤原・源・平三氏族のみが一二世紀後半の段階に至ってなお、従前通り顯官を輩出しているので、これら三氏族をして他余の一九氏族よりも、調査対象全期間たる三六二年間における登場延年数と登場延員数とを格段に多からしめているのは、当然のことといえよう。事実、件の三氏族中、わけでも藤原・源両氏のみが、それら全二二氏族の中にあつて、その三六二年間のすべての年次に亘って間断なく顯官を輩出し続けているのであり、そしてそれが両氏の年平均員数において、藤原氏の場合、一三・三九名、約一三名、源氏の場合、五・〇二名、約五名に及んでいる。また、平氏の場合にしても、件の三六二年間中、一〇二年間（約二八％）に亘り、たとえ断続的であるとはいえ、延一九〇名（年平均二名弱（約一・八六名）、これを三六二年間で計算すれば、年平均〇・五二名となる。）の顯官を輩出している。ただし、各年毎における平氏出身の参議以上者数の、全二二氏族出身のそれに占める比率（以下、こうした比率を「参議以上者年次比率」と仮称する。）において最高を印する年次は全く認められない。こうしてみれば、それら三氏族にあつても、とりわけ藤原・源両氏出身顯官の「参議以上者年次比率」の高さも自ずと諒察されるところである。なお、こうした事柄の実態について、いま少し詳しく述べてみよう。

調査対象全期間たる三六二年間において、各年毎の「参議以上者年次比率」が最高を印してきた氏族は、例の二二氏族中、藤原・源両氏あるのみである。いま、これら両氏の当該比率のあり様について、これを他余の諸氏族のそれと比

較考覈しつつまとめて記すと次のようになる。

一、三六二年間における二二氏族の「参議以上者年次比率」をみるに、それが最も高率を印するとともに、長期間に及ぶのは、藤原氏の場合であり、それに次ぐのが源氏の場合である。

二、その藤原氏の場合は、それが三六二年間のうち、承和一四（八四七）年、嘉祥二（八四九）年、同三（八五〇）年、天安元（八五七）年、貞観二（八六〇）年、同五（八六三）年、同一八（八七六）年、元慶二（八七八）年、仁和四（八八八）年、寛平二（八九〇）年、同八（八九六）年、昌泰元（八九八）年、康和五（一一〇三）年、嘉承元（一一〇六）年、天仁元（一一〇八）年、天永元（一一一〇）年、の都合二四年間（これを以下、A期間（三六二年）を除外し、三三八年間において認められる。）

三、二にいうA期間にあって、藤原氏の「参議以上者年次比率」を悉く上廻るのは、一二氏族中、ひとり源氏のそれであるのみである。

四、その源氏の場合は、それが二にいうA期間の二四年間と、承和一〇（八四三）年、同二三（八四六）年、斉衡元（八五四）年、同三（八五六）年、天安一（八五八）年、貞観元（八五九）年、元慶三（八七九）年、同五（八八二）年、仁和二（八八六）年、同三（八八七）年、寛平三（八九二）年、同七（八九五）年、昌泰二（八九九）年、康和二（一一〇〇）年、同四（一一〇二）年、嘉承二（一一〇七）年、の二〇年間（これを以下、B期間（三六二年）との都合四四年間において認められる。）

五、一、四より、四にいうB期間をば、藤原・源氏以外の「参議以上者年次比率」が互いに相等しく、しかも、その比率がそれら両氏以外のすべての諸氏族のそれを上廻る期間と見做しうる。

こうして藤原・源氏のうち、とくに藤原氏の「参議以上者年次比率」が調査対象全期間たる天長八（八三一）年か

ら建久三（一一九二）年までの三六二年間において、如何に卓絶しているかをよく理会しうるのである。

以上、藤原・源両氏の「参議以上者年次比率」がそれぞれその三六二年間を通してほぼ全般的に高率を印するとともに、その中であつてそれがとりわけ顕著に表われているのは一体何時であるかといった事柄、等について触れてきたが、以下においては平氏に関するそうしたことをも含めて考察をさらに進めてみよう。

## 五

調査対象全期間たる三六二年間を通しての藤原・源・平三氏の「参議以上者年次比率」平均値を末尾付載表に拠つてみるに、藤原氏は約六六・四％、源氏は約二四・九％、そして平氏は約二・六％となる。この平均値は、それら三氏それぞれの当該比率の高低状態を知る一つの有用な目安となろうが、ここでは、そうした年次比率の、とりわけ高い年次・年間と、それとは対照的な格別に低い年次・年間とをそれぞれ列挙して具象的に説述しておこう。

### 藤原氏の場合

（高率年次として、一応、八五％以上の年次を採り上げ、そのうち九〇％以上の年次には傍線を付記した。）

延喜三二（九三二）年、延長二（九二四）年、同四（九二六）年、寛弘五（一〇〇八）年、同八（一〇一一）年、寛仁四（一〇二〇）年、治安元（一〇二二）年、同二（一〇二三）年、同三（一〇二三）年、万寿元（一〇二四）年、同二（一〇二五）年、同三（一〇二六）年、長元元（一〇二八）年、長久元（一〇四〇）年、同三（一〇四二）年、保延四（一二三八）年、同六（一二四〇）年、久安元（一二四五）年、同二（一二四六）年、保元三（一二五八）年、平治元（一二五九）年、永暦元（一二六〇）年、応保元（一二六二）年、長寛二（一二六四）年、元暦元（一二八四）年、文治二（一一八六）年、建久二（一一九二）年、同三（一一九二）年、の四九年年間（このうち一八年年間が九〇％以上）

調査対象全期間たる三六二年間のうち、「参議以上者年次比率」が八五%以上を印するのは、藤原忠平（延喜二四（九一四）年）天曆三（九四九）年<sup>（一）</sup>内は当該者を台閣首班者とする期間、以下同様。）、同道長（長徳二（九九六）年）寛仁二（一〇一八）年、同頼通（寛仁三・四（一〇一九・一〇二〇）年および長元三（一〇三〇）年）治暦四（一〇六八）年、同公季（治安元（一〇二二）年）長元二（一〇二九）年、同忠通（保安四（一一二三））保元三（一一五八）年、同宗輔（平治元（一一五九）年、永暦元（一一六〇）年）、同伊通（応保元（一一六一）年）永萬元（一一六五）年というように、当然のことながら、各当該年次における台閣首班者はすべて藤原氏によって占められ、このうち当該比率がとくに九〇%以上に達するのは、傍線付記人物を台閣首班者とする時期である。これに対し、承和九（八四二）年）同（一四（八四七）年、嘉祥二（八四九）年、同三（八五〇）年、貞観二（八六〇）年、同三（八六二）年の、藤原緒嗣（天長八（八三一）年）承和一〇（八四三）年）源常（承和一一（八四四）年）齊衡元（八五四）年）藤原良房（齊衡二（八五五）年）貞観一四（八七二）年）をそれぞれ台閣首班者とする年次・期間の当該比率は、三〇%以下というように同氏のそれとしては最低を印している。

#### 源氏の場合

（高率年次として、一応、四〇%以上の年次を採り上げ、そのうち五〇%以上の年次には傍線を付記した。）

元慶二（八七八）年、同五（八八二）年、仁和元（八八五）年）同三（八八七）年、同四（八八八）年）寛平三（八九二）年、同四（八九二）年）同七（八九五）年、同八（八九六）年、同九（八九七）年、昌泰元（八九八）年、同二（八九九）年、天延二（九七四）年）天元三（九八〇）年、康和元（一〇九九）年）同四（一一〇二）年、同五（一一〇三）年）天永元（一一一〇）年、同二（一一二二）年）永久二（一一二四）年、元永二（一一二九）年）保安二（一一三二）年、の四三年間（このうち一五年間が五〇%以上）

調査対象全期間たる三六二年間のうち、「参議以上者年次比率」が四〇%以上を印するのは、1 源融（貞観一五（八七三）年）元慶三（八七九）年および寛平四（八九二）年）同七（八九五）年<sup>（一）</sup>内は当該者を台閣首班者とする期間、以下同様。）、2 藤原基経（元慶四（



八八〇年、寛平三（八九二）年、3 藤原良世（寛平八（八九六）年）、4 源能有（寛平九（八九七）年）、5 藤原時平（昌泰元（八九八）年、延喜九（九〇九）年）、6 藤原兼通（天延元（九七三）年、貞元二（九七七）年）、7 藤原頼忠（天元元（九七八）年、寛和二（九八六）年）、8 藤原師通（永長元（一〇九六）年、康和元（一〇九九）年）、9 源俊房（康和二（一一〇〇）年、天永二（一一一一）年）、10 藤原忠実（天永三（一一一二）年、保安二（一一二二）年）というように、藤原氏七名（23567810の七名）・源氏三名（149の三名）、都合一〇名のそれぞれを台閣首班者とする年次・期間中に見出だされ、しかも、この藤原氏七名は、いずれも先記した同氏についての高率年次・期間における台閣首班者中に所見されない人物たちであること。そしてその藤原氏七名中の二名（2 基経・3 良世の二名）と源氏三名（1 融・4 能有・9 俊房の三名）のうち、とりわけ源氏三名のすべてが、当該比率五〇％以上を印する傍線付記年次における台閣首班者であることは、当面問題として、事柄の内容とその性格からして極めて自然なあり様といえよう。一方、これに対して、「参議以上者年次比率」が一〇％以下を印するのは、1 天長八（八三二）年、2 延喜三（九三二）年、延長二（九二四）年、承平元（九三二）年、同三（九三三）年、3 長保四（一〇〇二）年、寛弘元（一〇〇四）年、4 治安元（一〇二二）年、万寿元（一〇二四）年、5 保延六（一一四〇）年、保元二（一一五七）年、6 永暦元（一一六〇）年、7 応保元（一一六一）年、長寛元（一一六三）年、8 治承元（一一七七）年、同三（一一七九）年、9 同四（一一八〇）年、寿永二（一一八三）年、元暦元（一一八四）年、の三十九年間であり、傍波線付記部分の1 は藤原緒嗣、2 は同忠平、3 は同道長、4 は同公季、5 は同忠通、6 は同宗輔、7 は同伊通、8 は同基房、9 は同基通をそれぞれ台閣首班者とする年次・年間である。これら1-9の人物はいずれも藤原氏であり、しかも、これら九名のうち、4（公季）、5（忠通）、6（宗輔）の三名がすでに触れた同氏の九〇％以上という高率を印する傍線付記年次・年間における台閣首班者のすべてであることもまた、その内容と性格からして極めて自然な様態といえよう。

平氏の場合 (高率年次として、一応、一五%以上の年次を採り上げ、そのうち二〇%以上の年次には傍線を付記した。)

承平三(九三三)年、仁安二(一一六七)年、同三(一一六八)年、嘉応元(一一六九)年、同二(一一七〇)年、承安元(一一七二)年、同三(一一七三)年、同四(一一七四)年、治承二(一一七八)年、養和元(一一八二)年、寿永二(一一八三)年、の一六年間 (このうち四年間が二〇%以上)

調査対象全期間たる三六二年間のうち、「参議以上者年次比率」が一五%以上を印するのは、承平三(九三三)年、仁安二(一一六七)年、同三(一一六八)年、嘉応元(一一六九)年、同二(一一七〇)年、承安元(一一七二)年、同三(一一七三)年、同四(一一七四)年、治承二(一一七八)年、養和元(一一八二)年、寿永二(一一八三)年、の一六年間であり、このうち当該比率が二〇%以上に達するのは、傍線付記の四年間のみである。そしてこの四年間とて、その時の台閣首班者は藤原基通であり、平氏としてはそうした最高の当該比率を有するその四年間のみならず、某かの「参議以上者年次比率」をもつ一〇二年間においても、己が氏族より台閣首班者を送り出した史実は全く存在しないのである。かの太政大臣平清盛にしても、廟堂における上席者として摂政藤原基房を仰いでいたのである。

以上、藤原・源・平三氏それぞれの「参議以上者年次比率」を相互に校比して、その高低・優劣のあり様について通時的観点から種々検討を加えてきたが、つぎに調査対象全期間たる三六二年間をトータル的に眺めた場合に、例の二二氏族中、当該比率の最も卓絶する藤原氏を中心として、これに源・平両氏のそれを対比させつつ、藤原氏を含めたそれら三氏の当該比率のあり方の実態をより詳細に追究してみよう。

## 六

既述のごとく調査対象全期間たる三六二年間にあって、頭官を台閣に送った二二氏族中、藤原氏以外の諸氏の「参議

以上者年次比率」で、藤原氏のそれを凌駕するのは、ひとり源氏のそれあるのみであり、その期間は、承和一四（八四

源常

源融

七）年、嘉祥二（八四九）年、同三（八五〇）年、天安元（八五七）年、貞観二（八六〇）年、同五（八六三）年、同

藤原基経

藤原良世

八（八七六）年、元慶元（八七七）年、同二（八七八）年、仁和四（八八八）年、寛平二（八九〇）年、同八（八九六）年、

源能有

藤原時平

源俊房

同九（八九七）年、昌泰元（八九八）年、康和五（一一〇三）年、嘉承元（一一〇六）年、天仁元（一一〇八）年、天永

元（一一一〇）年、の二四四年間（金期間の約  
六・六三%）に限られている。ところで、この二四四年間における源氏の各年毎の参議以

上者数は藤原氏のそれを上廻っているが、いまその実態を窺いみるに、二名ずつ上廻る元慶二（八七八）年と寛平九（八九七）年の二年間を除く二二年間は、すべて一名ずつ上廻るにすぎない。そしてその二四四年間における台閣首班者

は何人であり、また、その首班にあった期間（年数）は如何ほどであるかというに、上記傍線右肩に示すごとく源常の三年間、藤原良房の五年間、源融・藤原基経の各三年間、藤原良世・源能有・藤原時平の各一年間、源俊房の七年間という具合であり、同一首班者としては、源俊房の七年間が最も長期に亘るものである。それにこの八名の首班者中、源氏が四名おり、しかも、この四名中、融・能有・俊房の三名は、すでに源氏の五〇%以上の高率年次における首班者として指摘したところであるが、件の三名がここに所見されるのは、参議以上者数において源氏が藤原氏よりも二名ずつ上廻っているとした元慶二（八七八）年と寛平九（八九七）年のうち、前者における首班者が源融であり、後者におけるそれが源能有であることからすれば、極く自然なあり方といえよう。さらにそれら八名の首班者中に藤原氏が良房・基経・良世・時平の四名みられるものの、これら四名が先に触れた藤原氏の八五%以上の高率年次における首班者中に所見されないのもまた、極めて自然なあり様ということになろう。

つぎに調査対象全期間たる三六二年間にあつて藤原氏を除く諸氏の各「参議以上者年次比率」のうち、源氏のそれを上廻るのは、①天長八（八三二）年、②承平元（九三二）年、③同二（九三三）年、④同三（九三三）年、⑤仁安二（一

一六七) 年、⑥同三(一一六八) 年、⑦嘉応元(一一六九) 年、⑧同二(一一七〇) 年、⑨承安元(一一七二) 年、⑩同二(一二七二) 年、⑪同三(一二七三) 年、⑫同四(一二七四) 年、⑬安元元(一二七五) 年、⑭同二(一二七六) 年、⑮治承元(一二七七) 年、⑯同三(一二七九) 年、⑰同四(一二八〇) 年、⑱養和元(一二八二) 年、⑲寿永元(一二八二) 年、⑳同二(一二八三) 年、の二〇年間である。この期間のうち、当該比率の上で、①の一年間のみににおいては清原氏の方が、また、それ以外の②～⑳の一九年間のいずれの年次においても平氏の方が、それぞれ源氏を上廻っているといえる。ちなみに、この二〇年間における台閣首班者が一体何人であるかというに、①の一年間が藤原緒嗣、②～④の三年間が藤原忠平、⑤～⑯の十二年間が藤原基房、⑰～⑳の四年間が藤原基通というように、その全期間を通じての台閣首班者はすべて藤原氏であり、ここに源氏が所見されないのは、当然の帰結ともいえるが、その藤原氏にしても、忠平以外の三者(緒嗣・基房・基通)を台閣首班者とする年所の当該比率は、同氏のそれとすれば、さほど高いものではなく、件の①～⑳の二〇年間にあっては、平氏としての当該比率の最も高い⑥⑨⑩⑪(各二一%)の四年間を含んでいる。こうした点からも上記の二〇年間は、平氏が台閣において、その勢威を大いに伸張し、誇示した時期といえるのである。いま、先記①～⑳の二〇年間において諸氏が輩出した参議以上者数を吟味してみるに、その員数の上で、それら各年次のいずれにおいても圧倒的に卓越する藤原氏を除けば、①～⑳のうち、②～⑳の一九年間にあっては、いずれの年次においても平氏の員数が、他氏、わけても、その平氏に準じて多くの員数を有する源氏のそれよりも、詳言すれば、⑳の一年間では五名、⑮⑱の二年間では三名、⑥⑨～⑫⑭⑯⑰の八年間では二名、②～⑤⑦⑧⑬の七年間では一名それぞれ優っている。残る①の一年間にあっては、平氏の参議以上者は存在せず、清原氏が二名、源氏が一名という具合である。

かくして調査対象全期間たる天長八(八三二) 年から建久三(一一九二) 年までの三六二年間に諸氏より台閣に送り

出された参議以上者は、延員数にして七三〇〇名、氏族数にして二二氏の多きを数えるが、その中にあって「参議以上者年次比率」が他余の諸氏のそれに比して格段に高く、しかもそうした状態が長期多年に及ぶのは藤原氏であり、そしてそれが、その全三六二年間の約九三・四％に当たる三三八年間に亘って確認されること。その残余の約六・六％に当たる二四年間のすべての年次比率において件の藤原氏を上廻るのは、ひとり源氏のみであること。それに加えてこの源氏は、件の比率において他余の諸氏族を上廻る年次・時期を二〇年間（全三六二年間の約五・五二％） 藤原氏と共有すること。こうした源氏の当該比率をみてみるに、全三六二年間のうち、やはり同じくその約五・五二％に当たる二〇年間においてのみ、同氏は上記の藤原氏を除く他余の諸氏族中、平（一九年間）・清原（一年間）両氏に下廻ること、等を知りうるのである。

そこでつぎに、こうした源氏の参議以上者について、その内実そのものに係わる諸種の事柄を聊か取り上げてみようと思う。

## 七

さて、調査対象全期間たる三六二年間における源氏の参議以上者は、嵯峨・仁明・文徳・清和・陽成・光孝・宇多・醍醐・村上・三条・後三条の一一源氏・九〇名の多きを数えるが、これら九〇名に及ぶ参議以上者個々の、(一)所属系統と系譜 (二)生母父者の氏族と所属系統 (三)所属系統と極官 (四)参議補任時の年齢と極官・所属系統 (五)官職在任期間(延年数)・在任員数と極官・所属系統 等といった事柄について、以下に順次説述してみよう。

表2

番号	名	所屬	生母父の氏	太左	右内	大	中	参	参議補任の 年次と年齢	在任 期間	中納言補任の 年次と年齢	在任 期間	大納言補任の 年次と年齢	在任 期間	内大臣補任の 年次と年齢	在任 期間	右大臣補任の 年次と年齢	在任 期間	左大臣補任の 年次と年齢	在任 期間	太政大臣補任の 年次と年齢	在任 期間	薨卒時の年次 と年齢
33	自明	藤原	藤原						天徳二(五八)48	一五	天保二(五五)51	三	天保三(五七)53	六									天徳二(五八)48
32	兼忠	清和	太政大臣藤原基経女						天曆八(五五)54	二〇													天徳二(五八)58
31	雅信	宇多	左大臣藤原時平女						天曆三(五三)32	八													正暦四(五九)74
30	正明	光孝							天曆三(五三)59	五													天徳二(五八)66
29	等	藤原							天曆二(五二)68	一〇													天徳二(五八)72
28	兼明	藤原	参議藤原青根女						天曆七(五五)31	一一	天曆七(五五)40	一五	康保四(五七)54	五									永延一(五七)74
27	庶明	宇多	山城守橘公康女						天曆四(五四)39	一一	天曆五(五五)49	五											天曆九(五九)53
26	清平	光孝							天曆四(五四)65	五													天曆九(五九)69
25	高明	光孝	右大弁藤原女周子						天曆二(五二)26	九	天曆二(五二)34	七	天曆六(五六)40	一四									天元三(六〇)67
24	是茂	光孝	近江守藤原門宗女						承平四(五五)50	六	天曆二(五二)55	三											天曆四(六〇)57
23	清盛	隆成	紀氏女						延長三(五五)42	一五	天曆二(五二)56	一〇	天曆二(五二)65	三									天曆四(六〇)67
22	悦	藤原	彈正尹阿保親王女						延長三(五五)56	一一													延長八(六四)67
21	當時	文德							延長二(五四)44	一一	延長三(五五)54	一											延長八(六四)67
20	昇	藤原							寛平七(五七)37	一四	延長八(五八)50	七	延長四(五八)56	五									延長八(六四)67
19	希	藤原							寛平七(五七)47	五	昌泰二(五九)51	四	延長三(五八)69	二									延長八(六四)67
18	湛	藤原	紀伊守藤原経親女						寛平五(五五)38	一〇	延長三(五五)47	七	延長三(五八)53	一									延長八(六四)67
17	貞恒	光孝							寛平三(五三)38	一													延長八(六四)67
16	興基	仁明							元慶八(六八)40	八	寛平三(五三)47	七	寛平六(五六)53	五									延長八(六四)67
15	直	光孝	式部卿仲野親王女						元慶八(六八)28	八	寛平三(五三)35	一											延長八(六四)67
14	是忠	仁明							元慶八(六八)49	九													延長八(六四)67
13	光	仁明							元慶八(六八)48	七	元慶八(六八)38	一〇	寛平三(五三)47	六									延長八(六四)67
12	冷	藤原	右大臣橘氏公女時子						貞観三(六三)28	一一	元慶八(六八)38	一〇	寛平三(五三)47	六									延長八(六四)67
11	舒	文德	大伴氏女						貞観三(六三)47	一一	元慶八(六八)38	一〇	寛平三(五三)47	六									延長八(六四)67
10	能	藤原							貞観三(六三)44	九	貞観三(六三)40	三	貞観三(六三)42	一一									延長八(六四)67
9	勳	藤原	大原全子						貞観三(六三)35	九	貞観三(六三)43	七	貞観三(六三)49	三									延長八(六四)67
8	生	藤原	笠離子						貞観三(六三)24	一七	貞観三(六三)40	三	貞観三(六三)42	一一									延長八(六四)67
7	融	藤原	大原全子						貞観三(六三)24	一七	貞観三(六三)40	三	貞観三(六三)42	一一									延長八(六四)67
6	多	仁明							貞観三(六三)24	一七	貞観三(六三)40	三	貞観三(六三)42	一一									延長八(六四)67
5	明	藤原	更衣姫高氏女						貞観三(六三)24	一七	貞観三(六三)40	三	貞観三(六三)42	一一									延長八(六四)67
4	弘	藤原	上毛野氏女						貞観三(六三)24	一七	貞観三(六三)40	三	貞観三(六三)42	一一									延長八(六四)67
3	定	藤原	尚侍百済慶命						貞観三(六三)24	一七	貞観三(六三)40	三	貞観三(六三)42	一一									延長八(六四)67
2	常	藤原	更衣姫高氏女						貞観三(六三)24	一七	貞観三(六三)40	三	貞観三(六三)42	一一									延長八(六四)67
1	信	藤原	広井氏						貞観三(六三)24	一七	貞観三(六三)40	三	貞観三(六三)42	一一									延長八(六四)67



70	基綱	宇多	承徳(二〇六)49	九	嘉承(二〇六)57	一一	保安(三〇三)38	一	永久(二二七)68
71	基綱	宇多	承徳(二〇六)49	八	嘉承(二〇六)57	一一	保安(三〇三)38	一	永久(二二七)68
72	能俊	宮内卿藤原師仲女	康和(二〇三)15	八	嘉承(二〇六)57	一一	保安(三〇三)38	一	永久(二二七)68
73	能俊	若狹守藤原基女	康和(二〇三)31	二二	天永(二二二)42	一一	保安(三〇三)53	一	長承(二二五)65
74	重資	信濃守藤原伊綱女	康和(二〇三)29	一一	保安(三〇三)49	一一	長承(二二五)59	五	保安(三〇三)63
75	重資	春宮亮藤原泰通女	嘉承(二〇六)62	一一	永久(二二五)71	八	長承(二二五)59	五	保安(三〇三)63
76	雅定	勸修寺藤原基生女	元永(二二二)26	四	保安(三〇三)29	一一	保安(三〇三)43	二	久安(二二五)56
77	有仁	大納言藤原忠女	不経参議	九	大治(二二五)54	七	保安(三〇三)18	三	久安(二二五)57
78	師時	参議藤原平女	保安(三〇三)46	二	天承(二二二)53	五	保安(三〇三)20	六	保安(三〇三)34
79	雅兼	因幡守藤原惟子	大治(二二五)52	三	保延(二二二)56	二	保安(三〇三)20	六	保安(三〇三)34
80	俊雅	大和守平重姪女	長承(二二五)54	一	保延(二二二)56	二	保安(三〇三)20	六	保安(三〇三)34
81	俊雅	参河守藤原綱女	久安(二二二)45	七	保元(二二二)39	五	仁安(二二二)43	九	仁安(二二二)51
82	師仲	大納言藤原能俊女	保元(二二二)41	四	平治(二二二)44	一	永曆(二二二)43	八	仁安(二二二)51
83	定房	大納言藤原能俊女	保元(二二二)28	四	永曆(二二二)31	七	仁安(二二二)37	八	仁安(二二二)51
84	雅頼	大納言藤原能俊女	長寛(二二二)38	六	嘉承(二二二)43	一一	仁安(二二二)37	八	仁安(二二二)51
85	資賢	備中守高階為家女	仁安(二二二)54	五	嘉承(二二二)58	九	治承(二二二)67	三	仁安(二二二)51
86	通親	典藥助藤原行兼女	治承(二二二)32	六	文治(二二二)37	一一	建久(二二二)47	五	正治(二二二)51
87	通資	典藥助藤原行兼女	文治(二二二)32	六	文治(二二二)37	一一	建久(二二二)47	五	正治(二二二)51
88	雅賢	皇門院輔仕真木屋	文治(二二二)38	六	建久(二二二)38	一〇	正治(二二二)51	四	正治(二二二)51
89	兼忠	中納言藤原成女	文治(二二二)28	一五	建仁(二二二)40	一一	建久(二二二)44	一	正治(二二二)51
90	頼朝	熱田大宮司藤原範女	不経参議	一五	建仁(二二二)40	一一	建久(二二二)44	一	正治(二二二)51

〔備考〕 通番号欄中の○印付加は、その時々における諸源氏中の首位者、極官欄中の●印付加は、その時々における諸氏族中の首位者をそれぞれ示す。極官欄の太は太政大臣、左は左大臣、右は右大臣、内は内大臣、大は太納言、中は中納言、参は参議をそれぞれ示し、後掲表5・表7においても同様である。在任期間欄の在任期間とは、各当該官職に在任した延年数の意であり、後掲表9においても同様である。全九〇名中、87通資の一名のみは、参議以上の各官職への補任時および薨卒時の年齢をそれぞれ明確にしえないので、それら各該当部分を無記入のままとしてある。在任期間欄中の★1・★24は以下の通りである。すなわち、1承和七(八〇)年上表辞所職。承和四(八〇)年更任。2嘉祥三(八〇)年出家。3寛平三(八九)年改爲親王。4延喜四(九四)年致仕。5安和二(九六)年貶大宰権帥。即日入道。6貞元三(八七)年有勳爲親王。7正暦三(九三)年上表辞之。但譲伊周卿云々。8寛仁三(一〇三)年被納辞表。致仕。9長久四(一〇三)年辞職。以男正四位下経親朝臣申任備前守。10長元九(一〇三六)年出家。11康平四(一〇六二)年辞職。以男侍從五位上俊明申任加賀守。12承保一(一〇五五)年辞。以外孫左中将藤原兼申任八座。13嘉承一(一〇五五)年辞職。依信頼卿縁坐也。14天治二(一〇四二)年出家。所勞之上依兼懷也。15天永三(一二三三)年辞退。以男忠高申任美乃守。16久寿一(一二三三)年出家。年表之本意云々。17保延二(一二三三)年依病出家。18平治二(一二三三)年解官。依信頼卿縁坐也。19治承三(一二三三)年辞職。以男侍從兼忠申任右少辨。20安元二(一二三三)年被下辞状。治承三(一二三三)年更任。21治承三(一二三三)年解官。被出宮城。養和二(一二三三)年更任。寿永二(一二三三)年辞退。以孫左近衛権少将雅賢朝臣申任左近衛中将叙正四下。出家。22建久二(一二三三)年辞退。23建仁三(一二三三)年辞退。24建久二(一二三三)年辞職。以上、「公卿補任」に拠る。▽



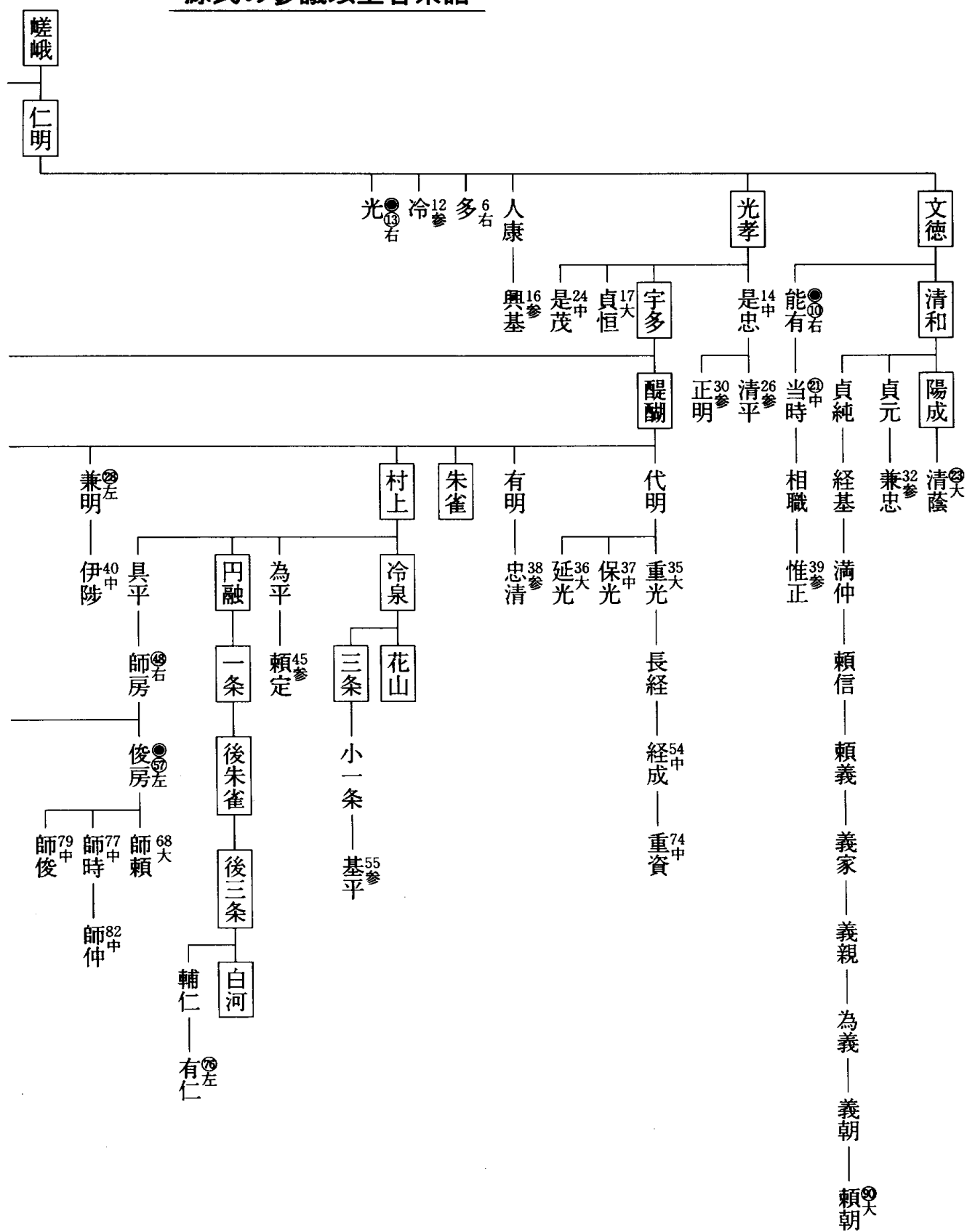
表3

世(子)孫 天皇	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	合計
嵯峨	8③	6③	1								15⑥
仁明	3①	1									4①
文徳	1①	1①		1							3②
清和		1								1①	2①
陽成	1①										1①
光孝	3	2									5
宇多		3②	3②	4	2			1		1	14④
醍醐	3②	7②	2	5	4	1					22④
村上		2①	3①	8①	4①	3②	2①				22⑦
三条		1									1
後三条		1①									1①
合計	19⑧	25⑩	9③	18①	10①	4②	2①	1		2①	90②⑦

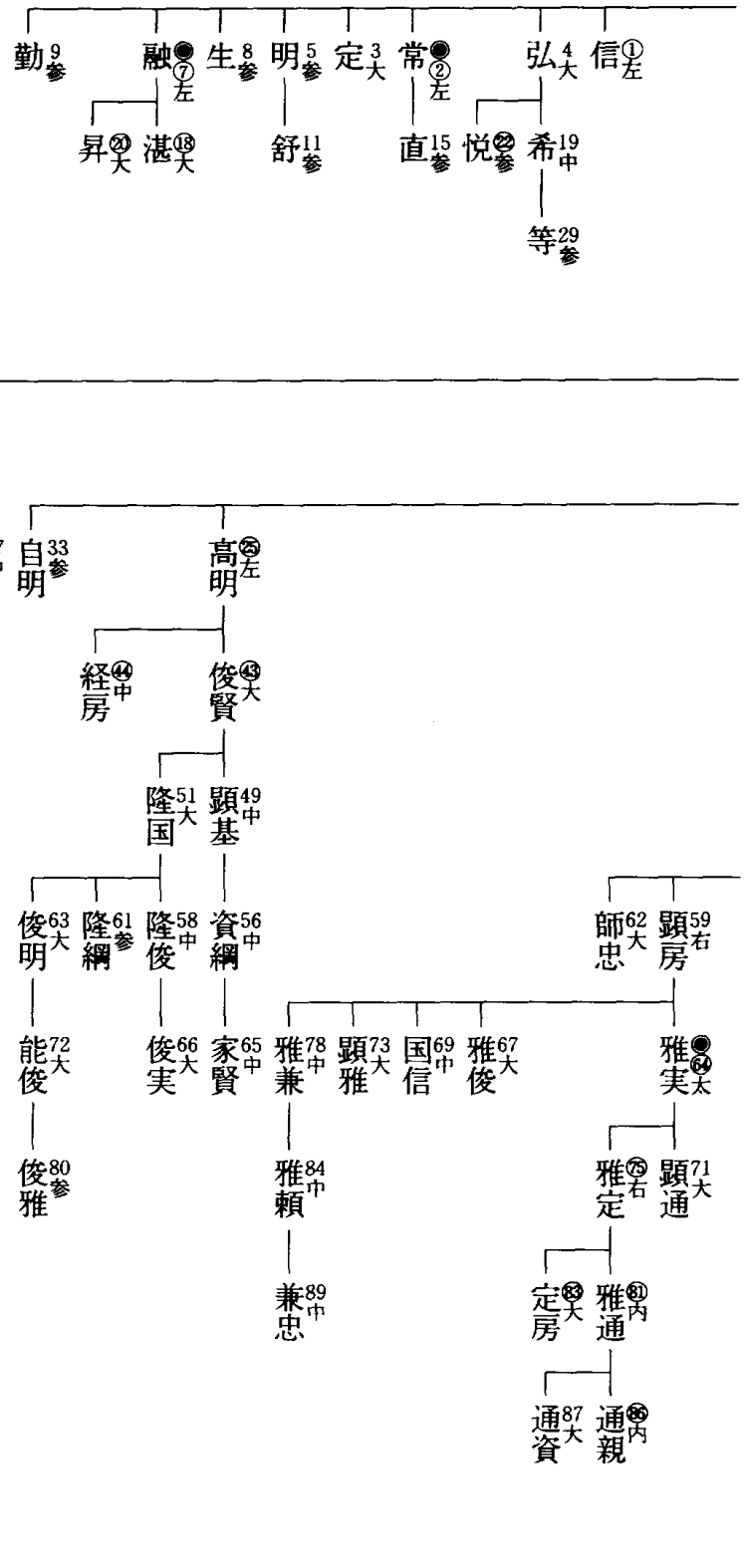
〔備考〕○印付数字は、○印付加者数を示す。

(一)について 全一源氏・九〇名の参議以上者の所属系統と系譜、すなわち各源氏の参議以上者とその鼻祖たる天皇との世代関係について、これを表1～表3および系譜(源氏の参議以上者系譜)に拠ってみるに、嵯峨源氏は①②③④⑤⑦⑧⑨⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲(これらの数字は、表2における通番号である。以下同様。)の一五名を数え、これらのうち、①②③④⑤⑦⑧⑨の八名が一世子(皇子、以下同様。)、⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱の六名が二世孫、⑲の一名が三世孫であり、○印付加者(表2備考欄参照)が①②⑦⑧⑯⑰⑱の六名存する。仁明源氏は⑥⑫⑬⑭⑮の四名を数え、これらのうち、⑥⑫⑬の三名が一世子、⑭の一名が二世孫であり、○印付加者が⑬の一名存する。文徳源氏は⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒の三名を数え、これらのうち、⑩の一名が一世子、⑪⑫の一名が二世孫、⑬⑭⑮の一名が三世孫であり、○印付加者が⑩⑪⑫の二名存する。清和源氏は⑳㉑の二名を数え、これらのうち、㉑の一名が二世孫、㉒の一名が一世孫であり、○印付加者が㉒の一名存する。陽成源氏は㉓の一名を数え、これは一世子

源氏の参議以上者系譜



左は左大臣、右は右大臣、内は内大臣、大は大納言、参は参議である。



であり、しかも○印付加者である。光孝源氏は14 17 24 26 30の五名を数え、これらのうち、14 17 24の三名が一世子、26 30の二名が二世孫であり、○印付加者が存在しない。宇多源氏は27 ③④ 41 42 46 47 50 52 53 60 70 85 88の一四名を数え、これらのうち、27 ③④の三名が二世孫、④④ 42 46の三名が三世孫、47 50 52 60の四名が四世孫、53 70の二名が五世孫、85の一名が八世孫、88の一名が一○世孫であり、○印不加者が③④ ④④ 46の四名存する。醍醐源氏は②⑤ 28 33 35 36 37 38 40 ④③ ④④ 49 51 54 56 58 61 63 65 66 72 74 80の二二名を数え、これらのうち、②⑤ 28 33の三名が一世子、35 36 37 38 40 ④③ ④④の七名が二世孫、49 51の二名が三世孫、54 56 58 61 63の五名が四世孫、65 66 72 74の四名が五世孫、80の一名が六世孫であり、○印付加者が②⑤ 28 ④③ ④④の四名存する。村上源氏は45 ④③ ⑤⑦ 59 62 ⑥④ 67 68 69 71 73 ⑦⑤ 77 78 79 ⑧① 82 ⑧③ 84 ⑧⑥ 87 89の二二名を数え、これらのうち、45 ④③の二名が二世孫、⑤⑦ 59 62の三名が三世孫、⑥④ 67 68 69 73 77 78 79の八名が四世孫、71 ⑦⑤ 82 84の四名が五世孫、⑧① ⑧③ 89の三名が六世孫、⑧⑥ 87の二名が七世孫であり、○印付加者が④③ ⑤⑦ ⑥④ ⑦⑤ ⑧① ⑧③ ⑧⑥の七名存する。三条源氏は55の一名を数え、これは二世孫であり、○印付加者が存在しない。後三条源氏は⑦⑥の一名を数え、これは二世孫であり、しかも○印付加者である。

以上、全一源氏・九〇名の所属系統と系譜について各源氏別に一渉り触れてみたが、これをここでは一応、トータル的な立場から次の諸点にまとめて指摘しておこう。

①、源氏の参議以上者を所属系統別にみると醍醐・村上両源氏がともに二二名ずつで最も多く、以下、嵯峨（一五名）↓宇多（一四名）↓光孝（五名）↓仁明（四名）↓文徳（三名）↓清和（二名）↓陽成・三条・後三条（各一名）の各源氏の順につづき、これら一源氏の中で参議以上者を一〇名以上輩出しているのは、嵯峨（一五名）・宇多（一四名）・醍醐（二二名）・村上（二二名）の四源氏のみであること。

②、源氏の参議以上者とその鼻祖たる天皇との世代関係についてみるに、二世孫が二五名で最も多く、以下、一世子（二九名）↓四世孫（一八名）↓五世孫（一〇名）↓三世孫（九名）↓六世孫（四名）↓七・一〇世孫（各二名）↓八世孫

(一名)の順につづき、これら一〇世(子)孫の中にあつて一五世(子)孫が八一名を数え、全九〇名の九〇%を占めていること。

③、一一源氏中、参議以上者を多有する醍醐・村上・嵯峨・宇多四源氏には、嵯峨源氏にのみ一世子が八名と多いのに対し、他余の醍醐・村上・宇多三源氏には、一五世(子)孫(ただし、このうち一世子は、これら三源氏中、醍醐源氏にのみ三名存する。)が多く、とりわけ醍醐源氏に二世孫が七名、村上源氏に四世孫が八名存するのは、それぞれ際立っている点といえること。

④、源氏の参議以上者中、その鼻祖たる天皇から最も下限の位置を占める者の世孫数は一〇世孫であり、これは一一源氏・九〇名の中で清和源氏の⑨(頼朝)と宇多源氏の88(雅賢)の二名のみである。ただし、一〇世(子)孫のうち、九世孫の事例のみは存在しないこと。

⑤、全一一源氏の参議以上者がそれぞれ何世代に亘って存在するかをみるに、その世代数において最も卓越するのは、宇多・醍醐・村上三源氏の六世代であり、以下、嵯峨・文徳両源氏(各三世代)↓仁明・清和・光孝三源氏(各二世代)↓陽成・三条・後三条三源氏(各一世代)の順となり、その世代数の最も多い宇多・醍醐・村上三源氏にあつては、世代の連続性において醍醐・村上両源氏とともに六世代(前者が一世子、六世孫、後者が二世孫、七世孫の各六世代。)で最も長期に及び、宇多源氏が四世代(同源氏の六世代は、二世孫、五世孫の四世代と。八・一〇各世孫の二世代とに分かたれている。)でそれに次いでいること。

⑥、全一一源氏のうちに、全源氏中の首位者たる○印付加者が如何ように存在するかをみるに、当該者数の多い順に列举すると、村上源氏が七名で最も多く、以下、嵯峨源氏(六名)↓宇多・醍醐両源氏(各四名)↓文徳源氏(二名)↓仁明・清和・陽成・後三条四源氏(各一名)↓光孝・三条両源氏(各ナシ)とつづき、光孝・三条両源氏に当該者が全く存在しないこと。また、この当該者が存在する世代数の多寡をみるに、村上源氏の六世代が最も多く、以下、嵯峨・文徳・宇多・醍醐四源氏(各二世代)↓仁明・清和・陽成・後三条四源氏(各一世代)↓光孝・三条両源氏(各ナシ)と

つづくこと。そして村上源氏の場合には、件の当該者七名が④師房（二世孫）、⑤俊房（三世孫）⑥雅実（四世孫）、⑦雅定（五世孫）、⑧雅通・⑧定房（各六世孫）、⑨通親（七世孫）というように、六世代に亘って連続して存在するものであること。

⑦、上記①⑤⑥より、全一源氏のうち、より多くの参議以上者を有するとともに、その参議以上者をより多くの連続した世代数に亘って輩出しているのは、醍醐・村上両源氏であること。そしてこれら両源氏のうち、全源氏中の首位者たる○印付加者をより多く有するとともに、この○印付加者をより多くの連続した世代数に亘って輩出しているのは、村上源氏であること。

(二)について 全一源氏・九〇名の参議以上者の、生母父者の氏族と所属系統について、前掲表2および後掲表4に拠ってみるに、まず、その生母父者の氏族を明らかにしえないのが嵯峨源氏に15（直）、19（希）、②〇（昇）、29（等）の四名、仁明源氏に6（多）、12（冷）、⑬（光）、16（興基）の四名、光孝源氏に17（貞恒）、26（清平）、30（正明）の三名、文徳源氏に②①（当時）の一名、の都合四源氏・一二名存する。この中には前述した○印付加者が⑬②①の三名おり、しかもこれら三名のうち⑬の一名は、後に(三)項において触れるように、その時々における源氏をも含めた諸氏族中の首位者、すなわち廟堂の首班者たるを示す●印付加者でもあり、こうしたいわば一代の著名な権勢者について、その生母父者の名前はおろか、氏族すら明らかにしえないのである。

つぎに、その生母父者の氏族を明らかにしうる七八名について、これを氏族別に整理分類して、その員数の多い順に列挙すると、藤原氏が⑬24②③3233③43536373842④④474951545556⑤5962676971727374⑦578⑧8789⑨の三五名（全九〇名の約三八・九％）で最も多く、以下、源氏が②⑤3940④④⑤50525358606163⑥⑥666870⑦⑦80⑧⑧84の二五名（全九〇名の約二七・八％）、皇親氏が14②④④の三名（全九〇名の約三・三％）、大原氏が⑦⑨、飯高氏が②⑤、橘氏が1127の各二名（各全九〇名の約二・二％）、広井氏が①、

百済王氏が3、上毛野氏が4、笠氏が8、大伴氏が⑩、紀氏が②③、平氏が79、高階氏が85、その他（雑仕真木屋）が88、の各一名（各全九〇名の約一・一％）の順につづくので、このように参議以上者の生母父者の氏族を明らかにしうる点において、諸氏族の中にあつて藤原・源両氏、わけても藤原氏が如何に卓絶しているかをよく理会しうるのである。そこでここでは、こうした藤原・源両氏の子女を生母とする源氏の参議以上者と、その生母の氏族別所属系統との関係について検討してみよう。

表4

藤原氏										氏族別
										源氏の参議以上者 (その所属系統)
37	36	35	③4	33	32	③1	②8	24	①8	その母方父者の 所属系統
保光 (醍醐)	延光 (醍醐)	重光 (醍醐)	重信 (宇多)	自明 (醍醐)	兼忠 (清和)	雅信 (宇多)	兼明 (醍醐)	是茂 (光孝)	湛 (嵯峨)	魚名流
真楯流	真楯流	真楯流	真楯流	巨勢磨流	真楯流	真楯流	巨勢磨流	真楯流		

56	55	54	51	49	47	④4	④3	42	38
資綱 (醍醐)	基平 (三条)	経成 (醍醐)	隆国 (醍醐)	顕基 (醍醐)	朝任 (宇多)	経房 (醍醐)	俊賢 (醍醐)	扶義 (宇多)	忠清 (醍醐)
真楯流	真楯流	蔵下磨流	真楯流	真楯流	魚名流	真楯流	真楯流	巨勢磨流	真楯流

⑦5	74	73	72	71	69	67	62	59	⑤7
雅定 (村上)	重資 (醍醐)	顕雅 (村上)	能俊 (醍醐)	顕通 (村上)	国信 (村上)	雅俊 (村上)	師忠 (村上)	顕房 (村上)	俊房 (村上)
清成流	真楯流	真楯流	真楯流	真楯流	魚名流	魚名流	真楯流	真楯流	真楯流

源氏									
45	④①	40	39	②⑤	⑨⑩	89	87	⑧⑥	78
頼定 (村上)	時中 (宇多)	伊陟 (醍醐)	惟正 (文徳)	高明 (醍醐)	頼朝 (清和)	兼忠 (村上)	通資 (村上)	通親 (村上)	雅兼 (村上)
醍醐源氏	光孝源氏	嵯峨源氏	文徳源氏	嵯峨源氏	巨勢磨流	魚名流	真楯流	真楯流	真楯流

65	⑥④	63	61	60	58	53	52	50	④⑥
家賢 (醍醐)	雅実 (村上)	俊明 (醍醐)	隆綱 (醍醐)	経信 (宇多)	隆俊 (醍醐)	資通 (宇多)	経長 (宇多)	経頼 (宇多)	道方 (宇多)
宇多源氏	醍醐源氏	宇多源氏	宇多源氏	光孝源氏	宇多源氏	清和源氏	光孝源氏	光孝源氏	醍醐源氏

84	⑧③	82	⑧①	80	77	⑦⑥	70	68	66
雅頼 (村上)	定房 (村上)	師仲 (村上)	雅通 (村上)	俊雅 (醍醐)	師時 (村上)	有仁 (後三条)	基綱 (宇多)	師頼 (村上)	俊実 (醍醐)
醍醐源氏	醍醐源氏	村上源氏	醍醐源氏	清和源氏	三条源氏	村上源氏	光孝源氏	醍醐源氏	醍醐源氏

# 藤原氏の場合

藤原氏を生母父者とする源氏の参議以上者は、全部で三五名を数えるが、その内訳を藤原氏の所属

系統別にみてみると、真楯流が24③①32③④35363738④③④④49515556⑤⑦59627172737478⑧⑥87の二四名、魚名流が①⑧47676989の五名存するので、いわゆる北家流としては二九名となる。巨勢磨流が②③3342⑨⑩の四名存するので、いわゆる南家流は四名となる。清成流が⑦⑤、蔵下磨流が54の各一名存するので、いわゆる式家流は二名となる。これにより、藤原氏全三五名中二九名(約八二・九%)までが北家流ということで、源氏の参議以上者の生母父者は、藤原氏諸流のうち北家流、中に就き真楯流(北家流二九名中二四名で約八二・八%)が最も卓越していることを知りうる。そしてこの真楯流二四名の生母父者がそれぞれ何人を鼻祖としているかというに、29(是茂)の一名を除く二三名は、すべて真楯の二世孫冬嗣であるのに対し、その29





源氏が②④⑤⑧⑨⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲の八名、村上源氏が45⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲の八名、以下、宇多源氏(七名) ↓ 文徳・後三条源氏(各一名) とつづき、嵯峨・仁明・清和・陽成・光孝・三条六源氏には認められない。このうち特に一五名の参議以上者を輩出している嵯峨源氏にそうした事例が認められないのは、たとえ記録史料の上において、その所生母の出自記載についての明細を欠く場合が多いにしても、一応、注意されてよいことと思う。一体に源氏の男性がその配偶者を同族内から納れる場合、果たして如何なる所属系統の女性がその対象とされているかというに、いま、源氏の参議以上者の父母両者それぞれの所属系統を検按してみると次のようになる。

男性側の 所属系統	女性側の 所属系統		
文徳源氏	文徳源氏	39の一名……………一ケース・一名、自流同士の婚姻を除けばナシ	
宇多源氏	清和源氏	53の一名	
宇多源氏	光孝源氏	④①⑤②⑥⑦⑧の五名	……………三ケース・七名
宇多源氏	醍醐源氏	④⑥の一名	
醍醐源氏	嵯峨源氏	②⑤④⑦の二名	
醍醐源氏	清和源氏	80の一名	
醍醐源氏	宇多源氏	58⑥⑦⑧⑨の四名	……………四ケース・八名、自流同士の婚姻を除けば三ケース・七名
醍醐源氏	醍醐源氏	66の一名	
村上源氏	醍醐源氏	45⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲の六名	……………三ケース・八名、自流同士の婚姻を除けば二ケース・
村上源氏	村上源氏	82の一名	

村上源氏——三条源氏……77の一名

七名

後三条源氏——村上源氏……⑦⑥の一名……一ケース・一名

これにより、源氏の参議以上者の父母双方の所属系統がそれぞれ如何ように組合わされ、その①組合せケースと、②件の組合せによって出生し、出現した参議以上者数とがそれぞれ如何ほど存するかを知りうるが、これを参議以上者の父者の所属系統を中心にみてみると、

文徳源氏の場合 ①は一ケース ②は一名

宇多源氏の場合 ①は三ケース ②は七名

醍醐源氏の場合 ①は四ケース ②は八名

村上源氏の場合 ①は三ケース ②は八名

後三条源氏の場合 ①は一ケース ②は一名

となつて、①では醍醐源氏、②では醍醐・村上両源氏がそれぞれ他余の諸源氏を凌駕していること、そしてそこには嵯峨・仁明・清和・陽成・光孝・三条六源氏の事例が全くみられないことを知りうる。さらにそれら六源氏の中にあつて、一五名という多くの参議以上者を輩出している嵯峨源氏にそうした事例が全く認められないのは、一顧されてよいことと思う。

つぎに参議以上者の母者の所属系統を中心にみてみると、

嵯峨源氏の場合 ①は一ケース ②は二名

文徳源氏の場合 ①は一ケース ②は一名

清和源氏の場合 ①は二ケース ②は二名

光孝源氏の場合 ①は一ケース ②は五名

宇多源氏の場合 ①は一ケース ②は四名

醍醐源氏の場合 ①は三ケース ②は八例

村上源氏の場合 ①は二ケース ②は二例

三条源氏の場合 ①は一ケース ②は一例

となつて、①②双方とも醍醐源氏が他余の諸源氏よりも卓越していること。そしてそこには仁明・陽成・後三条三源氏の事例が全くみられないこと、等を理会しうる。

かくして源氏の参議以上者の父母双方それぞれの所属系統について検討を加えてみた結果、父者の所属系統数よりも母者のそれの方が遥かに多いことを明らかにしえた。これは父者たる個々の男性達が己等の全所属系統数よりも遥かに多くの所属系統数の中から、その配偶者となるべき女性を求めていることを物語っており、そしてそこから当時の婚姻形態たる招婿婚の形跡を読み取ることも可能であろう。

(三)について 全一源氏・九〇名の参議以上者の所属系統と極官について、既掲系譜(源氏の参議以上者系譜)および表5に拠つてみるに、およそ左記のごとき事柄を指摘しえよう。

1、全一源氏中、三条源氏を除く他余の一〇源氏は、すべて大納言もしくはそれ以上の頭官を極官とし、その例外たる三条源氏は、参議(一名)を極官とすること。

2、全一源氏・九〇名の参議以上者の極官についてみるに、大納言が二五名で最も多く、以下、参議(二四名) ↓ 中納言(二三名) ↓ 左大臣(九名) ↓ 右大臣(六名) ↓ 内大臣(二名) ↓ 太政大臣(一名)の順につづき、大納言・中納言・

表5 参議で都合七二名（（全体の八〇％を占める））を数える。従って内大臣以上的大臣クラスは全部で一八名（（全体の二〇％を占める））となること。

極官 所属系統	太	左	右	内	大	中	参	合計	○	●
嵯峨		3			4	1	7	15	6	2
仁明			2				2	4	1	1
文徳			1			1	1	3	2	1
清和					1		1	2	1	
陽成					1			1	1	
光孝					1	2	2	5		
宇多		2			4	3	5	14	4	
醍醐		2			7	9	4	22	4	
村上	1	1	3	2	7	7	1	22	7	2
三条							1	1		
後三条		1						1	1	
合計	1	9	6	2	25	23	24	90	27	6

〔備考〕合計欄右の○は○印付加者、●は●印付加者をそれぞれ示す。

3、全一一源氏中、内大臣以上的大臣クラスを極官とするのは、嵯峨（左大臣三名）・仁明（右大臣二名）・文徳（右大臣一名）・宇多（左大臣二名）・醍醐（左大臣二名）・村上（太政大臣一名・左大臣一名・右大臣三名・内大臣二名）・後三条（左大臣一名）七源氏であり、他余の清和・陽成・光孝・三条四源氏は大臣クラス以上の頭官を輩出していないこと。

4、そうした大臣クラスの者がそれぞれ各天皇の何世（子）孫に相当するかをみてみると、嵯峨源氏の左大臣三名（①信、②常、⑦融）、仁明源氏の右大臣二名（6多、⑬光）、文德源氏の右大臣一名（⑩能有）、醍醐源氏の左大臣二名（⑳兼明、㉑高明）はすべて一世子であり、宇多源氏の左大臣二名（㉒雅信、㉓重信）はともに二世孫、村上源氏の太政大臣一名（㉔雅実）は四世孫、左大臣一名（㉕俊房）は三世孫、右大臣三名のうち、㉖師房は二世孫、㉗顕房は三世孫、㉘雅定は五世孫、内大臣二名のうち、㉙雅通は六世孫、㉚通親は七世孫、後三条源氏の左大臣一名（㉛有仁）は二世孫であること。

5、○印付加者は合計二七名存し（末尾付載表(二)参照）、これは一一源氏中、光孝・三条両源氏を除く九源氏にみられるが、その九源氏の中では村上源氏が七名と最も多く、以下、嵯峨源氏（六名）↓宇多・醍醐両源氏（各四名）↓文德源氏（二名）↓仁明・清和・陽成・後三条四源氏（各一名）の順につづくこと。

6、●印付加者は合計六名存し（末尾付載表(二)参照）、その内訳は、嵯峨（②常、⑦融）村上（㉕俊房、㉔雅実）両源氏が各二名、仁明（⑬光）文德（⑩能有）両源氏が各一名であること。

右記1～6のうち、ここでは、とくに6の●印付加者六名について、これら六名を台閣首班者とする時期ならびに當時における台閣構成主要メンバーを示す表6に基拠して若干触れておこう。

(1)、②源常の場合 承和一〇（八四三）年にその上席者たる左大臣藤原緒嗣が七〇才で薨じた後を承けて、翌同一（八四四）年より、自らが薨ずる斉衡元（八五四）年までの一一年間に亘り左大臣として廟堂の首位の座にあった。しかしてこの期間に次席の地位にあったのは右大臣橘氏公（承和一一（八四四）年同）・右大臣藤原良房（嘉祥元（八四八）年同）・両者であり、源常の薨去後は、それら両者のうち右大臣藤原良房が斉衡二（八五五）年より台閣の首班者となった（表6(1)参照）。

表6

(1) 承和一〇(八三)年

左大臣 藤原緒嗣	70	薨去
右大臣 源 常	32	
大納言 橘氏公	61	
大納言 藤原良房	40	

承和一一(八四)年

左大臣 源 常	33	
右大臣 橘氏公	62	
大納言 藤原良房	41	
中納言 源 信	35	

承和一二(八五)年

左大臣 源 常	34	
右大臣 橘氏公	63	
大納言 藤原良房	42	
中納言 源 信	36	

承和一三(八六)年

左大臣 源 常	35	
右大臣 橘氏公	64	
大納言 藤原良房	43	
中納言 源 信	37	

承和一四(八七)年

左大臣 源 常	36	
右大臣 橘氏公	65	薨去
大納言 藤原良房	44	
中納言 源 信	38	

嘉祥一(八八)年

左大臣 源 常	37	
右大臣 藤原良房	45	
大納言 源 信	39	
中納言 源 弘	37	

嘉祥二(八九)年

左大臣 源 常	38	
右大臣 藤原良房	46	
大納言 源 信	40	
中納言 源 弘	38	

嘉祥三(九〇)年

左大臣 源 常	39	
右大臣 藤原良房	47	
大納言 源 信	41	
中納言 源 定	36	

仁寿一(八五)年

左大臣 源 常	40	
右大臣 藤原良房	48	
大納言 源 信	42	
中納言 源 定	37	

仁寿二(八六)年

左大臣 源 常	41	
右大臣 藤原良房	49	
大納言 源 信	43	
中納言 源 定	38	

仁寿三(八七)年

左大臣 源 常	42	
右大臣 藤原良房	50	
大納言 源 信	44	
中納言 源 定	39	

齊衡一(八八)年

左大臣 源 常	43	薨去
右大臣 藤原良房	51	
大納言 源 信	45	
權大納言 藤原良相	38	

齊衡一(八五)年

右大臣	藤原良房	52
大納言	源 信	46
權大納言	藤原良相	39
中納言	源 定	41

(2) 貞觀一四(八七)年

太政大臣	藤原良房	69	薨去
左大臣	源 融	51	
右大臣	藤原氏宗	63	薨去
右大臣	藤原基經	37	
左大臣	源 融	52	
右大臣	藤原基經	38	
大納言	源 多	43	

貞觀一六(八四)年

左大臣	源 融	53
右大臣	藤原基經	39
大納言	源 多	44

貞觀一七(八五)年

左大臣	源 融	54
右大臣	藤原基經	40
大納言	源 多	45

貞觀一八(八六)年

左大臣	源 融	55
右大臣	藤原基經	41
大納言	源 多	46

元慶一(八七)年

左大臣	源 融	56
攝政 右大臣	藤原基經	42
大納言	源 多	47

元慶二(八七)年

左大臣	源 融	57
攝政 右大臣	藤原基經	43
大納言	源 多	48

元慶三(八八)年

左大臣	源 融	58
攝政 右大臣	藤原基經	44
大納言	源 多	49

元慶四(八八)年

關白 太政大臣	藤原基經	45
左大臣	源 融	59
大納言	源 多	50



(3) 寬平三(八二)年

太政大臣	藤原基經	56	薨去
左大臣	源 融	70	
右大臣	藤原良世	70	
大納言	源能有	47	

寬平四(八三)年

左大臣	源 融	71	
右大臣	藤原良世	71	
大納言	源能有	48	
中納言	源 光	48	

寬平五(八四)年

左大臣	源 融	72	
右大臣	藤原良世	72	
大納言	源能有	49	
中納言	源 光	49	

寬平六(八五)年

左大臣	源 融	73	
右大臣	藤原良世	73	
大納言	源能有	50	
中納言	藤原時平	24	

寬平七(八六)年

左大臣	源 融	74	薨去
右大臣	藤原良世	74	
大納言	源能有	51	
中納言	藤原時平	25	

寬平八(八七)年

左大臣	藤原良世	74	致仕
右大臣	源能有	52	
中納言	藤原時平	26	
中納言	源 光	52	

寬平九(八八)年

右大臣	源能有	53	薨去
大納言	藤原時平	26	
權大納言	源 光	53	
權大納言	菅原道真	53	

昌泰一(八九)年

大納言	藤原時平	27	
權大納言	菅原道真	54	
權大納言	源 光	54	
中納言	藤原高藤	61	

(5) 延喜九(九〇)年

左大臣	藤原時平	39	薨去
右大臣	源 光	65	
中納言	源 湛	65	
中納言	平惟範	55	

延喜一〇(九一)年

右大臣	源 光	66	
中納言	源 湛	66	
中納言	源 昇	52	
中納言	藤原忠平	31	

延喜一一(九二)年

右大臣	源 光	67	
大納言	藤原忠平	32	
中納言	源 湛	67	
中納言	源 昇	53	

延喜一二(九三)年

右大臣	源 光	68	
大納言	藤原忠平	33	
中納言	源 湛	68	
中納言	源 昇	54	

延喜二三(九三)年

右大臣	源光	69	薨去
大納言	藤原忠平	34	
大納言	源湛	69	
中納言	源昇	55	

延喜一四(九四)年

右大臣	藤原忠平	35	
大納言	源湛	70	致仕
大納言	源昇	56	
大納言	藤原道明	59	

嘉保二(一〇五)年

左大臣	源俊房	61	
関白	藤原師通	34	
内大臣	源経信	80	
大納言	藤原宗俊	50	

永長一(一〇九六)年

関白	藤原師通	35	
内大臣	源俊房	62	
大納言	源経信	81	
権大納言	藤原宗俊	51	

康和二(一一〇〇)年

左大臣	源俊房	66	
右大臣	藤原忠実	23	
内大臣	源雅実	42	
大納言	源師忠	47	

康和三(一一〇一)年

左大臣	源俊房	67	
右大臣	藤原忠実	24	
内大臣	源雅実	43	
大納言	源師忠	48	

康和四(一一一三)年

左大臣	源俊房	68	
右大臣	藤原忠実	25	
内大臣	源雅実	44	
大納言	源師忠	49	

康和五(一一一四)年

左大臣	源俊房	69	
右大臣	藤原忠実	26	
内大臣	源雅実	45	
大納言	源師忠	50	

(6) 嘉保一(一〇九四)年

関白	藤原師実	53	辞職
関白	藤原師通	33	
左大臣	源俊房	60	
右大臣	源顕房	58	薨去

(7) 康和一(一一〇九)年

関白	藤原師通	38	薨去
内大臣	源俊房	65	
権大納言	源師忠	46	
権大納言	源俊明	56	

長治一(一一四)年

左大臣	源俊房	70
右大臣	藤原忠実	27
内大臣	源雅実	46
大納言	源師忠	51

長治二(一一五)年

左大臣	源俊房	71
関白 右大臣	藤原忠実	28
内大臣	源雅実	47
大納言	源師忠	52

嘉承一(一一六)年

左大臣	源俊房	72
関白 右大臣	藤原忠実	29
内大臣	源雅実	48
大納言	源師忠	53
辞職		

嘉承二(一一七)年

左大臣	源俊房	73
関白 右大臣	藤原忠実	30
内大臣	源雅実	49
大納言	源俊明	64

天仁一(一二〇)年

左大臣	源俊房	74
摂政 右大臣	藤原忠実	31
内大臣	源雅実	50
大納言	源俊明	65

天仁二(一二〇)年

左大臣	源俊房	75
摂政 右大臣	藤原忠実	32
内大臣	源雅実	51
大納言	源俊明	66

天永一(一二〇)年

左大臣	源俊房	76
摂政 右大臣	藤原忠実	33
内大臣	源雅実	52
大納言	源俊明	67

天永二(一二二)年

左大臣	源俊房	77
摂政 右大臣	藤原忠実	34
内大臣	源雅実	53
大納言	源俊明	68

天永三(一二三)年

摂政 太政大臣	藤原忠実	35
左大臣	源俊房	78
内大臣	源雅実	54
大納言	源俊明	69

(8) 保安一(一二三)年

関白	藤原忠実	44	辞職
左大臣	源俊房	87	薨去
右大臣	源雅実	63	
内大臣	藤原忠通	25	

保安二(一二三)年

太政大臣	源雅実	64
関白 左大臣	藤原忠通	26
右大臣	藤原家忠	61
内大臣	源有仁	20

撰政	藤原忠通	27
太政大臣	源雅実	65
右大臣	藤原家忠	62
内大臣	源有仁	21

〔備考〕各欄中の数字は年齢を示す。某年次における年齢には過誤・矛盾が認められるものもあるが、すべて『公卿補任』に拠って作成した。

（2）、⑦源融の場合 左大臣として廟堂の首班者たるの地位にあった時期は左記の二期である。

一期 貞観一四（八七二）年にその上席者たる太政大臣藤原良房が六九歳で薨じた後を承けて翌同一五（八七三）年より、右大臣藤原基経が太政大臣に越任される元慶四（八八〇）年の前年たる同三（八七九）年までの七年間。

二期 右記の藤原基経が寛平三（八九二）年に五六歳で薨じた後を承けて翌同四（八九二）年に再び廟堂の首班の座に帰り咲いてより、同七（八九五）年に自らが七四歳で薨じるまでの四年間。

こうして源融が左大臣として台閣の首位の座にあったのは、通算一一年間ということになる。なお、彼が薨じた翌寛平八（八九六）年に左大臣藤原良世が台閣の首位者となった（表6（2）（3）（4）参照）。

（3）、⑩源能有の場合 寛平八（八九六）年にその上席者たる左大臣藤原良世が致仕した後を承けてより、翌同九（八九七）年に自らが薨じるまでの一年間、左大臣として台閣の首位の座にあった。その後昌泰元（八九八）年より大納言藤原時平が件の地位についた（表6（3）（4）参照）。

（4）、⑬源光の場合 延喜九（九〇九）年にそれまで廟堂の首班者であった左大臣藤原時平が三九歳で薨じた後を承けて同一〇（九一〇）年より右大臣として首班の座につき、爾後、自らが薨じる同一三（九一三）年までの四年間、件

の地位にあった。その後同一四(九一四)年より右大臣藤原忠平が台閣の首位者となった(表6(5)参照)。

(5)、⑤源俊房の場合 左大臣として廟堂の首班者たるの地位にあった時期は左記の二期である。

一期 嘉保元(一〇九四)年にその上席者たる関白藤原師実が辞職した後を承けてより、永長元(一〇九六)年に関白内大臣藤原師通が台閣首班者となるまでの一年間。

二期 康和元(一〇九九)年に関白内大臣藤原師通が辞職した後を承けて翌同二(一一〇〇)年より、その次席者たる藤原忠実が摂政太政大臣に越任されて廟堂の首位者となった天永三(一一一二)年の前年たる同二(一一一一)年までの一二年間。

こうして源俊房が左大臣として台閣の首位の座にあったのは、通算一三年間ということになる(表6(6)(7)参照)。

(6)、⑥源雅実の場合 保安二(一一二二)年に廟堂の首班者たる関白藤原忠実が辞職した後を承けて翌同三(一一二三)年より、その次席者たる藤原忠通に越任(関白左大臣より摂政に補される)されて首位の座を譲る同四(一一二三)年までの一年間、源氏で唯一の太政大臣として台閣の首位にあった(表6(8)参照)。

以上、右記(1)～(6)により、源氏の●印付加者六名がそれぞれ●印付加者として君臨した期間は、嵯峨源氏の②常が一一年間、同源氏の⑦融が一一年間、文徳源氏の⑩能有が一一年間、仁明源氏の⑬光が四年間、村上源氏の⑤俊房が一三年間、同源氏の⑥雅実が一一年間ということになり、これを個人別にみれば、村上源氏の⑤俊房が最も長期に及び、以下、嵯峨源氏の②常・⑦融両者(各一一年間)→仁明源氏の⑬光(四年間)→文徳源氏の⑩能有、村上源氏の⑥雅実(各一一年間)の順につづき、さらにこれを所属系統別にみれば、嵯峨源氏が二三年間で最も長期に及び、以下、村上源氏(一四年間)→仁明源氏(四年間)→文徳源氏(一年間)の順となることが分かる。

ところで、こうした源氏の●印付加者が●印付加者として君臨する際に、その直前、もしくは直後に登場していた、

あるいは登場する源氏以外の●印付加者は、一体如何なる者かというに、②常の場合、直前が左大臣藤原緒嗣（薨去）、直後が右大臣藤原良房、⑦融の場合、その一期は、直前が太政大臣藤原良房（薨去）、直後が関白太政大臣藤原基経、その二期は、直前が太政大臣藤原基経（薨去）、直後が左大臣藤原良世、⑩能有の場合、直前が左大臣藤原良世（致仕）、直後が大納言藤原時平、⑬光の場合、直前が左大臣藤原時平（薨去）、直後が右大臣藤原忠平、⑮俊房の場合、その一期は、直前が関白藤原師実（辞職）、直後が関白内大臣藤原師通、その二期は、直前が関白内大臣藤原師通（薨去）、直後が摂政太政大臣藤原忠実、⑯雅実の場合、直前が関白藤原忠実（辞職）、直後が摂政藤原忠通というように、そのすべてが藤原氏であり、そして、その直前の同氏が薨去するか、あるいは辞職するか、それとも致仕するかのいずれかの場合に限り、件の●印付加者たるの地位が同氏の某から源氏の某かへと移り替わっているのである。従ってそこには、源氏の●印付加者たるの地位にあったところの、②融がその一期において藤原基経に、⑮俊房がその一期において藤原師通に、その二期において藤原忠実に、そして⑯雅実が藤原忠通に、それぞれ越任されてそうした地位を譲り渡すというような藤原氏の場合にのみ認められる「越任」のケースが全くみられないのである。これは、先述したように本稿で調査対象期間とする三六二年間における各年毎の参議以上者数の面で源氏が藤原氏を凌駕する

#### 年次

#### ●印付加者

○承和 一四（八四七）年 ②常  
○嘉祥 二（八四九）年 ②常  
○嘉祥 三（八五〇）年 ②常  
天安 一（八五七）年 藤原良房  
貞観 二（八六〇）年 藤原良房

#### 年次

#### ●印付加者

貞観 三（八六二）年 藤原良房  
貞観 四（八六二）年 藤原良房  
貞観 五（八六三）年 藤原良房  
○貞観 一八（八七六）年 ⑦融  
○元慶 一（八七七）年 ⑦融

○元慶 二（八七八）年 ⑦融

仁和 四（八八八）年 藤原基経

寛平 一（八八九）年 藤原基経

寛平 二（八九〇）年 藤原基経

寛平 八（八九六）年 藤原良世

○寛平 九（八九七）年 ⑩能有

昌泰 一（八九八）年 藤原時平

○印年次は●印付加者が源氏の場合を示す。

の二四年間に関しても、藤原氏が、すなわち良房が五年間、基経が三年間、良世・時平が各一年間、の計一〇年間に亘って●印付加者たるの地位を占めている事実とともに、源氏が大いに権勢を張大させていた時期にあつてさえ、藤原氏がなお依然として著大なる威権勢力を保持していたことを明示する証跡といえるのである。

なお、各年毎の参議以上者数の面で源氏が藤原氏を凌駕する右記二四年間中に、源氏の●印付加者が②常・⑦融・⑩能有・⑤⑦俊房の四名までも所見されるのは、極めて自然なあり様とも理会しうるが、ともかくも、それはそれとして大いに注意しておいてよいことであろう。

(四)について 全一源氏・九〇名の参議以上者の、(ア)参議補任時の年齢と極官、(イ)参議補任時の年齢と所属系統、の両者のうち、まず前者(ア)について表7に拠ってみるに、およそ左記のごとき諸点を知りえよう（この(四)項は、参議以上者数を八九名とし、考説する（表7備考欄参看）。）。

イ、一〇代の場合 計五名の内訳は、太政大臣一名、左大臣一名、右大臣一名、大納言二名となり、計五名の半数

○康和 五（一一〇三）年	⑤⑦俊房
○長治 一（一一〇四）年	⑤⑦俊房
○長治 二（一一〇五）年	⑤⑦俊房
○嘉承 一（一一〇六）年	⑤⑦俊房
○天仁 一（一一〇八）年	⑤⑦俊房
○天仁 二（一一〇九）年	⑤⑦俊房
○天永 一（一一一〇）年	⑤⑦俊房

以上が、内大臣以上のいわゆる大臣クラスであり、最低でも大納言であること。

表 7

極官 参議補任時の年齢	太	左	右	内	大	中	参	合計
一〇代	1	1	1		2			5
二〇代		4	4		④	2	2	16
三〇代		4		2	⑩	8	5	29
四〇代			1		6	⑨	⑨	25
五〇代					2	3	⑤	10
六〇代						1	②	3
八〇代							1	1
合 計	1	9	6	2	24	23	24	89

〔備考〕七〇代の記載がないのは、当該事例が存在しないためである。また、87通資は、参議補任時および没年時の年齢を明確にしえないので、全九〇名より件の一名を差し引いた八九名を合計員数としてある。これらは後掲表8においても同様である。さらに大納言以下の極官中、年齢別にみて員数の最も多いものには○印を付した。

ロ、二〇代の場合 計一六名の内訳は、左大臣四名、右大臣四名、大納言四名、中納言二名、参議二名となり、大臣クラスと大納言以下とがそれぞれ八名ずつの同数となっていること。

ハ、三〇代の場合 計二九名の内訳は、左大臣四名、内大臣二名、大納言一〇名、中納言八名、参議五名となり、大臣クラスが六名、大納言以下が二三名であって、大納言以下にあっては、大納言が一〇名と最も多いこと。

ニ、四〇代の場合 計二五名の内訳は、右大臣一名、大納言六名、中納言九名、参議九名となり、大臣クラスは僅



か一名(⑬光)のみで、大納言以下にあつては、とくに中納言と参議がそれぞれ九名で最も多いこと。

ホ、五〇代の場合 計一〇名の内訳は、大納言二名、中納言三名、参議五名となり、大臣クラスは存在せず、大納言以下では参議が五名と最も多いこと。

へ、六〇代の場合 計三名の内訳は、中納言一名、参議二名となり、中納言が最も高官であつて、事例少数ではあるが、参議が最も多いこと。

ト、八〇代の場合 その内訳は参議一名(5明)のみであること。

かくして源氏の参議以上者の場合、参議補任時の年齢は、三〇代が二九名と最も多く、以下、四〇代(二五名)↓二〇代(一六名)↓五〇代(二〇名)↓一〇代(五名)↓六〇代(三名)↓八〇代(一名)↓七〇代(ナシ)の順についていること。そしてこれらの中にあつて大臣クラスを極官とするのは、四〇代の一名(⑬光)を除けば、他はすべて三〇代までに参議に補任された者のみに限られていることが分かる。その例外たる⑬光の一名とて、彼が参議に補任されたのは、四〇歳の時であることを念慮すれば、そうしたことがより一層明瞭となろう。

およそ参議補任時の年齢が若ければ若いほど、件の参議以上者の極官は高くなり、逆に参議補任時の年齢が老いていれば老いているほど、件の参議以上者の極官は低くなるのである。このことは、前記イートによって知られるところの、①参議補任時の年齢が高まるに伴い参議以上者数に占める大臣クラス者数の百分比が次第に低下している事実と、②大納言以下にあつては、参議補任時の年齢が二〇代よりも三〇代、三〇代よりも四〇代というように高まるに連れて、員数のより多く集中する極官も、大納言から中納言へ、中納言から参議へと漸次推移している事実とから、その可信性が明確に裏付けられるのである。

つぎに後者(イ)について表8に拠つてみるに、所属系統を軸にして参議補任時の年齢を眺めれば、嵯峨・仁明・文

表 8

所 属 系 統 参 議 補 任 時 の 年 齢	嵯 峨	仁 明	文 徳	清 和	陽 成	光 孝	宇 多	醍 醐	村 上	三 条	後 三 条	合 計
一〇代	1								③		1	5
二〇代	2	1	1			1		2	△⑧	1		16
三〇代	3	1				1	△6	△12	6			29
四〇代	△5	△2	△2	1	1		5	⑦	2			25
五〇代	2			1		△2	③		2			10
六〇代	1					1		1				3
八〇代	1											1
合 計	15	4	3	2	1	5	14	22	21	1	1	89

〔備考〕所属系統別、すなわち縦欄数値で最も多いものには△印、年齢別、すなわち横欄数値で最も多いものには○印をそれぞれ付す。

徳三源氏はともに四〇代、光孝源氏は五〇代、宇多・醍醐両源氏はともに三〇代、村上源氏は二〇代がそれぞれ他余の年齢におけるよりも最も多く（同表中の△印参照）、清和・陽成・三条・後三条四源氏は当該事例が僅少ということもあって、一概にそうした点での優劣・多寡を云々しえないこと。また、参議補任時の年齢を軸にして所属系統を眺めれば、一〇代では村上源氏の三名、二〇代では村上源氏の八名、三〇代では醍醐源氏の一二名、四〇代では醍醐源氏の七名、五〇代では宇多源氏の三名がそれぞれ他余の諸源氏における員数よりも最も多く（同表中の○印参照）、六〇代・八〇代では当該事例が僅少ということもあって、一概にそうした面での優劣・多寡を云々しえないこと。これを要するに、件の六〇代・八〇代を除いて考えれば、一〇代・二〇代では村上源氏、三〇代・四〇代では醍醐源氏、五〇代では宇多源氏がそれぞれ他余の諸源氏に較べてより多くの参議補任者を輩出していることになり、これは、大臣クラスの員数からいえば、村上源氏（七名）↓嵯峨源氏（三名）↓仁明・宇多・醍醐三源氏（各二名）の順とな



②②	②①	②⑩	19	①⑧	17	16	15	14	⑬	12	11	⑩	9	8	⑦	6	5
悦	當時	昇	希	湛	貞恒	興基	直	是忠	光	冷	舒	能有	勤	生	融	多	明
嵯峨	文德	嵯峨	嵯峨	嵯峨	光孝	仁明	嵯峨	光孝	仁明	仁明	嵯峨	文德	嵯峨	嵯峨	嵯峨	仁明	嵯峨
一一	一一	一四	五	一六	一〇	一	一四	八	八	九	七	一一	一二	九	九	一七	二
	一	七	四	六	七			一	七			一〇			七	三	
		五		二	一				五			六			三	一	
									一三			二				七	
															二四		
一二	一二	二六	九	二四	一八	一	一四	九	三三	九	七	二九	一二	九	四三	三八	二
40	39	38	37	36	35	③④	33	32	③①	30	29	②⑧	27	26	②⑤	24	②③
伊陟	惟正	忠清	保光	延光	重光	重信	自明	兼忠	雅信	正明	等	兼明	庶明	清平	高明	是茂	清蔭
醍醐	文德	醍醐	醍醐	醍醐	醍醐	宇多	醍醐	清和	宇多	光孝	嵯峨	醍醐	宇多	光孝	醍醐	光孝	陽成
一三	七	一六	九	五	一四	一三	一	五	二〇	八	五	一〇	一一	五	九	六	一五
七			一八	六	一五	七			三			一五	五		七	三	一〇
				二	二	一四			六			五			一四		三
						四			二						二		
						二			一六			七			三		
二〇	七	一六	二七	一三	三一	四〇	一	五	四七	八	五	三七	一六	五	三五	九	二八

58	⑤7	56	55	54	53	52	51	50	49	④8	47	④6	45	④4	④3	42	④1
隆俊 醍醐	俊房 村上	資綱 醍醐	基平 三条	経成 醍醐	資通 宇多	経長 宇多	隆国 醍醐	経頼 宇多	顕基 醍醐	師房 村上	朝任 宇多	道方 宇多	頼定 村上	経房 醍醐	俊賢 醍醐	扶義 宇多	時中 宇多
七	五	一八	一五	一四	一七	一六	一〇	一〇	七		二	九	二	二	一〇	五	七
一一	一四	一五		六		一二	一九		二	一〇		二四		九	一四		五
	九					三	八			三一					三		六
										五							
	二									九							
	三																
	九																
一八	六九	三三	一五	二〇	一七	三一	三七	一〇	九	五五	一二	三三	一二	二〇	二七	五	一八
⑦6	⑦5	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	⑥4	63	62	61	60	59
有仁 後三条	雅定 村上	重資 醍醐	顕雅 村上	能俊 醍醐	顕通 村上	基綱 宇多	国信 村上	師頼 村上	雅俊 村上	俊実 醍醐	家賢 醍醐	雅実 村上	俊明 醍醐	師忠 村上	隆綱 醍醐	経信 宇多	顕房 村上
	四	一〇	二一	一二	八	九	五	三三	八	一二	七	六	八	七	七	九	七
二	一五	八	一一	一二	一七	一二	一〇	二	一四	一六	一〇	五	一六	七		九	六
三	一四		五	一三	一			九	一二	六		一五	一八	二二		一五	二
一〇	二											一六					
六	五											八					一二
二																	二
三三	四〇	一八	三七	三七	二六	二一	一五	四四	三四	三四	一七	三五	四二	三五	七	三三	三七

84	83	82	81	80	79	78	77
雅頼 村上	定房 村上	師仲 村上	雅通 村上	俊雅 醍醐	師俊 村上	雅兼 村上	師時 村上
六	四	四	七	一	三	二	九
一	七	一	五		二	五	七
	二		九				
	三		八				
一七	三四	五	二九	一	五	七	一六
① ⑨の合計	⑨ 頼朝 清和	89 兼忠 村上	88 雅賢 宇多	87 通資 村上	86 通親 村上	85 資賢 宇多	
八〇九		一五	六	六	六	五	
五六九		二		一〇	一一	九	
三五四	一			七	五	三	
四五					四		
七七							
二二六							
三一六三							
	一	一七	六	二三	二六	一七	

〔備考〕在任期間欄の参は参議、中は中納言、大は大納言、内は内大臣、右は右大臣、左は左大臣、太は太政大臣をそれぞれ示す。

A……………5 8 11 12 14 16 19 24 26 29 30 32 33 39 42 49 50 61 78 79 80 82 88 90の二四名がこれに該当し、その内訳を事例数の多い官職順に挙示すると、参議が5 8 11 12 16 26 29 30 32 33 39 42 50 61 80 88の一六名、中納言が14 19 24 49 78 79 82の七名、大納言が90の一名となり、参議が最も多いことが分かる。○印付加者は、二四名中90の一名のみ(約〇・〇四%)である。

B……………9 15 17 21 22 27 36 38 40 41 44 45 47 53 54 55 58 65 69 74 77 84 89の二四名がこれに該当し、その内訳を事例数の多い官職順に挙示すると、中納言が21 27 40 44 54 58 65 69 74 77 84 89の一二名、参議が9 15 22 38 45 47 53 55の八名、大納言が17 36 41 85の四名となり、中納言が最も多いことが分かる。○印付加者は、二四名中21 22 41 44の四名(約一六・七%)である。

C……………2 3 4 10 18 20 23 37 43 70 71 81 86 87の一四名がこれに該当し、その内訳を事例数の多い官職順に挙示すると、大納言が3 4 18 20 23 43 71 87の八名、内大臣が81 86、中納言が37 70の各二名、左大臣が2、右大臣が10の各一名となり、大

納言が最も多いことが分かる。○印付加者は、一四名中②⑩⑱⑳㉓㉔㉕㉖の八名（約五七・一％）である。

D……………6 ⑬⑮⑳㉓㉔㉕㉖51 52 56 59 60 62 66 67 72 73 ⑦⑧㉑㉒の二〇名がこれに該当し、その内訳を事例数の多い官職順に挙示すると、大納言が35 51 52 60 62 66 67 72 73 ㉑の一名、左大臣が㉓㉔㉕㉖、右大臣が6 ⑬59 ⑦の各四名、中納言が㉕56の二名となり、大納言が最も多いことが分かる。○印付加者は、二〇名中⑬⑮⑳㉓㉔㉕㉖㉑の八名（四〇％）である。

E……………①⑦⑳㉑63 68の五名がこれに該当し、その内訳を事例数の多い官職順に挙示すると、左大臣が①⑦㉑の三名、大納言が63 68の二名となり、左大臣が僅少差ながら最も多いことが分かる。○印付加者は、五名中①⑦㉑の三名（六〇％）である。

F……………㉕㉖の二名がこれに該当し、その内訳を挙示すると、太政大臣・右大臣各一名となる。○印付加者は、二名中㉕㉖の二名（二〇〇％）である。

G……………㉗の左大臣一名のみがこれに該当し、これは○印付加者でもある。従って○印付加者は、一名中一名（二〇〇％）となる。

かくしてこれらA～G七等級のうち、該当事例数の極少な大臣クラス、それも右大臣ないし左大臣以上によってのみ占められているF G二等級を一応除いて考慮するならば、A等級では参議、B等級では中納言、C・D両等級ではともに大納言、E等級では左大臣の事例がそれぞれ最も卓出しているというように、在任期間が長くなれば長くなるほど、官職がより高位なものへと推移しており、また、○印付加者の比率が、たとえば局部的にはC等級（約五七・一％）→D等級（四〇％）のような下降現象も見られるとはいえ、大局的には漸次上昇しているという極めて自然なあり様を確認するのである。

つぎに後者の（2）について表10に拠ってみるに、参議の場合、在任延年数が最も長期に及ぶのは、醍醐源氏（二二

表10

官職 所屬系統	参議	中納言	大納言	内大臣	右大臣	左大臣	太政大臣	在任延年 数合計	参議以上者 合計員数
嵯峨	135(14)	61(8)	33(7)		5(1)	47(2)		281	15
仁明	35(4)	10(2)	16(2)		20(2)			81	4
文徳	29(3)	11(2)	6(1)		2(1)			48	3
清和	5(1)		1(1)					6	2
陽成	15(1)	10(1)	3(1)					28	1
光孝	37(5)	11(3)	1(1)					49	5
宇多	149(14)	86(9)	47(6)		6(2)	18(2)		306	14
醍醐	211(22)	206(18)	71(9)		2(1)	10(2)		500	22
村上	178(21)	172(21)	173(14)	35(5)	36(5)	39(1)	3(1)	636	22
三条	15(1)							15	1
後三条		2(1)	3(1)	10(1)	6(1)	12(1)		33	1
合 計	809(86) [約9.4]	569(65) [約8.8]	354(43) [約8.2]	45(6) [約7.5]	77(13) [約5.9]	126(8) [約15.8]	3(1) [3.0]	1983	90

〔備考〕括弧を付していない数字は在任延年数、( ) は在任員数、〔 〕は一人当たりの平均在任延年数をそれぞれ示す。

一年)であり、以下、村上源氏(二七八年)→宇多源氏(二四九年)→嵯峨源氏(二三五年)→光孝源氏(三七七年)→仁明源氏(三三五年)→文徳源氏(二九九年)→陽成・三条両源氏(各一五年)→清和源氏(五年)→後三条源氏(ナシ)当該源氏の唯一の事例たる有仁が「不経参議」のため、の順につづき、在任員数面でも醍醐源氏が二二名と最も多く、村上源氏が二二名でそれに次ぐ。

中納言の場合、在任延年数が最も長期に及ぶのは、醍醐源氏(二〇六年)であり、以下、村上源氏(一七二年)→宇多



源氏（八六年）↓嵯峨源氏（六一年）↓文徳・光孝両源氏（各二一年）↓仁明・陽成両源氏（各一〇年）↓後三条源氏（二年）↓清和・三条両源氏（各ナシ）の順につづき、在任員数面では村上源氏が二一名と最も多く、醍醐源氏が一八名でそれに次ぐ。大納言の場合、在任延年数が最も長期に及ぶのは、村上源氏（一七三年）であり、以下、醍醐源氏（七一年）↓宇多源氏（四七年）↓嵯峨源氏（三三年）↓仁明源氏（一六年）↓文徳源氏（六名）↓陽成・後三条両源氏（各三名）↓清和・光孝両源氏（各一名）↓三条源氏（ナシ）の順につづき、在任員数面でも村上源氏が一四名と最も多く、醍醐源氏が九名でそれに次ぐ。内大臣の場合、これは、諸源氏中、村上・後三条両源氏に限られ、このうち、在任延年数がより長期に及ぶとともに、より多くの在任員数を輩出しているのは、三五年・五名の村上源氏である。右大臣の場合、在任延年数が最も長期に及ぶのは、村上源氏（三六年）であり、以下、仁明源氏（二〇年）↓宇多・後三条両源氏（各六年）↓嵯峨源氏（五年）↓文徳・醍醐両源氏（各二年）の順につづき、在任員数面でも村上源氏が五名と最も多い。左大臣の場合、在任延年数が最も長期に及ぶのは、嵯峨源氏（四七年）であり、以下、村上源氏（三九年）↓宇多源氏（二八年）↓後三条源氏（二二年）↓醍醐源氏（一〇年）↓仁明・文徳・清和・陽成・光孝・三条六源氏（各ナシ）の順につづき、在任員数面でも嵯峨源氏が二名で、宇多・醍醐両源氏とともに最も多い。太政大臣の場合、これは、諸源氏の中にあつて村上源氏の、在任延年数にして三年、在任員数にして一名（<sup>64</sup>雅実）のみしか存在しない。

こうして全一源氏・九〇名の参議以上者の、参議から太政大臣までの各官職在任延年数とその在任員数とを所属系統別に検討してみた結果、参議の在任延年数と在任員数とにおいては、ともに醍醐源氏が、中納言の在任延年数・在任員数双方のうち、前者においては醍醐源氏が、後者においては村上源氏が、大納言・内大臣・右大臣・太政大臣の各在任延年数と各在任員数とにおいては、いずれも村上源氏が、左大臣の在任延年数・在任員数双方のうち、前者においては嵯峨源氏が、後者においては宇多・醍醐両源氏とともに嵯峨源氏がそれぞれ他余の諸源氏よりも卓越していることを

明らかにしうるのである。また、それら参議から太政大臣までの各官職に在任する延年数をトータルの眺めると、一人当たりの平均延年数において、参議が約九・四年、中納言が約八・八年、大納言が約八・二年、内大臣が約七・五年、右大臣が約五・九年、左大臣が約一五・八年、太政大臣が三・〇年となり、ひとり左大臣の場合のみを除いて考慮するならば、より高官になるに連れて、その在任延年数が次第に短くなっていることを理會しうる。さらにそうした参議から太政大臣までの各官職に在任する延年数が最も長期に及ぶのは、村上源氏（六三六年）であり、以下、醍醐源氏（五〇〇年）↓宇多源氏（三〇六年）↓嵯峨源氏（二八一年）↓仁明源氏（八一年）↓光孝源氏（四九年）↓文徳源氏（四八年）↓後三条源氏（三三年）↓三条源氏（一五年）↓清和源氏（六年）の順につづき、清和源氏が最も短期となっていることを知りうる。こうした統計面からのみの觀察結果による限りにおいては、確かに清和源氏なるものは参議以上者を台閣に輩出している全一源氏の中にあつて最も影の薄い存在とみられがちではある。しかしながら、件の清和源氏には⑨頼朝が存在するのである。彼は、記録・記載の上において、例えば、既述のごとくA等級中にあつて諸多の該当人士のすべてが中納言か参議かのいずれかなのに、彼一人のみが大納言というように唯一の例外事例であるのみならず、②常・④師房・⑦有仁らと同様の「不經参議」のほか、さらにそれに加えて「不經中納言」でもあるという、他に全く類例をみることもない、まさに異例中の異例ともいふべき存在なのである。しかしてこうした事柄は、他余の①〜89の八九名のすべてが貴族社会体制を基盤とする人々であるのに対して、件の⑨頼朝がそうした旧来の体制を超克することによつて新たに生成發展してきたところの武家社会体制を基盤とする人物、なおいえば、こうした体制造りに自らも参画主導して、それをほぼ完成の域まで成就せしめた当事者にほかならないのであり、そしてそうした歴史的使命をその身に負うた存在それ自体がもつ特異性に因由するものと見做しえよう。

## 八

本稿では、天長八（八三二）年に源信が参議に補されてから建久三（一一九二）年に源頼朝が征夷大將軍に任ぜられるまでの三六二年間において、いわば議政官たる参議以上の頭官を廟堂に送り出した二二氏族について、これらの諸氏族がそれぞれ如何なる期間に亘って如何ほどの参議以上者を輩出してきたかを精査検討することにより、それら諸氏族の威権勢力の消長の跡を通観するとともに、上記二二氏族中、とくに藤原氏に次いで多くの参議以上者を継続して輩出してきた源氏について、その諸流（所属系統）それぞれの内実を闡明すべく件の参議以上者個々の、（一）所属系統と系譜（二）生母父者の氏族と所属系統（三）所属系統と極官（四）参議補任時の年齢と極官・所属系統（五）官職在任期間（延年数）・在任員数と極官・所属系統 等といった諸種の事柄を検究することに努めてみたのである。ここでの試みは、あくまでも統計的考察に主眼を置いた基礎的作業であり、これによって新たに得られた知見は固より些少なものでしかないが、尠なくとも本稿で掲げた表題に関わる基本的な素材資料の提示という斯件の研究にあつて最も肝要な目途は、不十分ながらも達成しえたように思う。

1189 文治 5	1190 建久 1	1191 建久 2	1192 建久 3	所見初年	所見終年	合計年数	合計員数
27 (0.84)	25 (0.81)	25 (0.86)	25 (0.86)	天長 8 (831)	建久 3 (1192)	362	4848(13.39) (0.664)
				天長 8 (831)	貞觀 3 (861)	10	14
				天長 8 (831)	延喜16(916)	40	40
				天長 8 (831)	元慶 1 (877)	17	17
				天長 8 (831)	承和10(843)	13	13
				天長 8 (831)	承和 9 (842)	12	12
4 (0.13)	5 (0.16)	3 (0.10)	3 (0.10)	天長 8 (831)	建久 3 (1192)	362	1817(5.02) (0.249)
				天長10(833)	永觀 1 (983)	79	85
				天長10(833)	承和10(843)	11	11
				承和 2 (835)	天慶 2 (939)	19	19
				承和 5 (838)	貞觀 1 (859)	22	22
				承和 7 (840)	承和13(846)	7	7
				承和 9 (842)	仁寿 2 (852)	11	11
				承和14(847)	康保 4 (967)	27	27
				嘉祥 1 (848)	天曆 4 (950)	31	31
1 (0.03)	1 (0.03)	1 (0.03)	1 (0.03)	仁寿 1 (851)	建久 3 (1192)	102	190(1.86) (0.026)
				貞觀 2 (860)	貞觀12(870)	11	11
				貞觀 6 (864)	嘉承 1 (1106)	54	59
				貞觀12(870)	延喜10(910)	29	29
				貞觀14(872)	寛弘 5 (1008)	31	31
				延喜17(917)	延喜20(920)	4	4
				延喜17(917)	延喜18(918)	2	2
32 3	31 3	29 3	29 3				7300

後鳥羽						藤原兼実	
1181 養和 1	1182 寿永 1	1183 寿永 2	1184 元暦 1	1185 文治 1	1186 文治 2	1187 文治 3	1188 文治 4
23 (0.74)	22 (0.71)	31 (0.78)	27 (0.87)	25 (0.83)	24 (0.86)	25 (0.83)	25 (0.81)
3 (0.10)	3 (0.10)	2 (0.05)	2 (0.06)	4 (0.13)	4 (0.14)	4 (0.13)	5 (0.16)
5 (0.16)	6 (0.19)	7 (0.18)	2 (0.06)	1 (0.03)		1 (0.03)	1 (0.03)
31 3	31 3	40 3	31 3	30 3	28 2	30 3	31 3

							安德
							藤原基通
1173 承安 3	1174 承安 4	1175 安元 1	1176 安元 2	1177 治承 1	1178 治承 2	1179 治承 3	1180 治承 4
19 (0.66)	21 (0.68)	21 (0.70)	23 (0.74)	23 (0.77)	20 (0.67)	27 (0.77)	20 (0.80)
4 (0.14)	4 (0.13)	4 (0.13)	3 (0.10)	2 (0.07)	5 (0.17)	3 (0.09)	2 (0.08)
6 (0.21)	6 (0.19)	5 (0.17)	5 (0.16)	5 (0.17)	5 (0.17)	5 (0.14)	3 (0.12)
29 3	31 3	30 3	31 3	30 3	30 3	35 3	25 3

六条			高倉				
	藤原基実	藤原基房					
1165 永万 1	1166 仁安 1	1167 仁安 2	1168 仁安 3	1169 嘉応 1	1170 嘉応 2	1171 承安 1	1172 承安 2
20 (0.77)	25 (0.78)	19 (0.68)	19 (0.66)	18 (0.67)	21 (0.70)	19 (0.66)	19 (0.66)
3 (0.12)	4 (0.13)	4 (0.14)	4 (0.14)	4 (0.15)	4 (0.13)	4 (0.14)	4 (0.14)
3 (0.12)	3 (0.09)	5 (0.18)	6 (0.21)	5 (0.19)	5 (0.17)	6 (0.21)	6 (0.21)
26 3	32 3	28 3	29 3	27 3	30 3	29 3	29 3





	後白河
--	-----

1149 久安 5	1150 久安 6	1151 仁平 1	1152 仁平 2	1153 仁平 3	1154 久寿 1	1155 久寿 2	1156 保元 1
21 (0.91)	24 (0.96)	24 (0.92)	24 (0.92)	26 (0.93)	24 (0.92)	22 (0.96)	29 (0.94)
2 (0.09)	1 (0.04)	2 (0.08)	2 (0.08)	2 (0.07)	2 (0.08)	1 (0.04)	2 (0.06)
23 2	25 2	26 2	26 2	28 2	26 2	23 2	31 2

近 衛

1141 永治 1	1142 康治 1	1143 康治 2	1144 天養 1	1145 久安 1	1146 久安 2	1147 久安 3	1148 久安 4
23 (0.88)	22 (0.88)	21 (0.88)	20 (0.87)	21 (0.88)	21 (0.91)	21 (0.91)	21 (0.95)
2 (0.08)	2 (0.08)	2 (0.08)	2 (0.09)	2 (0.08)	2 (0.09)	2 (0.09)	1 (0.05)
1 (0.04)	1 (0.04)	1 (0.04)	1 (0.04)	1 (0.04)			
26 3	25 3	24 3	23 3	24 3	23 2	23 2	22 2



1125 天治 2	1126 大治 1	1127 大治 2	1128 大治 3	1129 大治 4	1130 大治 5	1131 天承 1	1132 長承 1
15 (0.71)	15 (0.71)	15 (0.71)	14 (0.70)	13 (0.68)	13 (0.65)	16 (0.70)	15 (0.68)
6 (0.29)	6 (0.29)	6 (0.29)	6 (0.30)	6 (0.32)	7 (0.35)	7 (0.30)	7 (0.32)
21 2	21 2	21 2	20 2	19 2	20 2	23 2	22 2

						崇 徳	
					源 雅実	藤原忠通	
1117 永久 5	1118 元永 1	1119 元永 2	1120 保安 1	1121 保安 2	1122 保安 3	1123 保安 4	1124 天治 1
15 (0.63)	15 (0.65)	15 (0.60)	15 (0.60)	13 (0.57)	16 (0.62)	16 (0.70)	15 (0.68)
9 (0.38)	8 (0.35)	10 (0.40)	10 (0.40)	10 (0.43)	10 (0.38)	7 (0.30)	7 (0.32)
24 2	23 2	25 2	25 2	23 2	26 2	23 2	22 2

			藤原忠実				
1109 天仁 2	1110 天永 1	1111 天永 2	1112 天永 3	1113 永久 1	1114 永久 2	1115 永久 3	1116 永久 4
11 (0.48)	11 (0.48)	13 (0.52)	14 (0.58)	14 (0.58)	14 (0.58)	17 (0.65)	15 (0.63)
12 (0.52)	12 (0.52)	12 (0.48)	10 (0.42)	10 (0.42)	10 (0.42)	9 (0.35)	9 (0.38)
23 2	23 2	25 2	24 2	24 2	24 2	26 2	24 2

	鳥羽
--	----

1101 康和 3	1102 康和 4	1103 康和 5	1104 長治 1	1105 長治 2	1106 嘉承 1	1107 嘉承 2	1108 天仁 1
11 (0.48)	12 (0.48)	11 (0.46)	11 (0.46)	11 (0.46)	12 (0.46)	12 (0.50)	11 (0.48)
11 (0.48)	12 (0.48)	12 (0.50)	12 (0.50)	12 (0.50)	13 (0.50)	12 (0.50)	12 (0.52)
1 (0.04)	1 (0.04)	1 (0.04)	1 (0.04)	1 (0.04)	1 (0.04)		
23 3	25 3	24 3	24 3	24 3	26 3	24 2	23 2

		源 俊房	藤原師通				源 俊房
1093 寛治 7	1094 嘉保 1	1095 嘉保 2	1096 永長 1	1097 承德 1	1098 承德 2	1099 康和 1	1100 康和 2
14 (0.58)	17 (0.63)	14 (0.61)	15 (0.65)	15 (0.65)	14 (0.58)	14 (0.56)	11 (0.48)
9 (0.38)	9 (0.33)	8 (0.35)	7 (0.30)	7 (0.30)	9 (0.38)	10 (0.40)	11 (0.48)
1 (0.04)	1 (0.04)	1 (0.04)	1 (0.04)	1 (0.04)	1 (0.04)	1 (0.04)	1 (0.04)
24 3	27 3	23 3	23 3	23 3	24 3	25 3	23 3





			藤原信長	藤原師実			
1077 承暦 1	1078 承暦 2	1079 承暦 3	1080 承暦 4	1081 永保 1	1082 永保 2	1083 永保 3	1084 応徳 1
17 (0.68)	16 (0.70)	16 (0.70)	18 (0.67)	15 (0.63)	17 (0.65)	16 (0.67)	17 (0.68)
8 (0.32)	7 (0.30)	7 (0.30)	9 (0.33)	9 (0.38)	9 (0.35)	8 (0.33)	8 (0.32)
25 2	23 2	23 2	27 2	24 2	26 2	24 2	25 2

				白河			
藤原教通							藤原師実
1069 延久 1	1070 延久 2	1071 延久 3	1072 延久 4	1073 延久 5	1074 承保 1	1075 承保 2	1076 承保 3
15 (0.63)	14 (0.61)	14 (0.61)	17 (0.68)	16 (0.67)	17 (0.65)	19 (0.70)	17 (0.71)
9 (0.38)	9 (0.39)	9 (0.39)	8 (0.32)	8 (0.33)	9 (0.35)	8 (0.30)	7 (0.29)
24 2	23 2	23 2	25 2	24 2	26 2	27 2	24 2

							後三条
1061 康平 4	1062 康平 5	1063 康平 6	1064 康平 7	1065 治暦 1	1066 治暦 2	1067 治暦 3	1068 治暦 4
17 (0.63)	16 (0.67)	17 (0.68)	18 (0.69)	18 (0.72)	16 (0.70)	16 (0.67)	18 (0.67)
10 (0.37)	8 (0.33)	8 (0.32)	8 (0.31)	7 (0.28)	7 (0.30)	8 (0.33)	9 (0.33)
27 2	24 2	25 2	26 2	25 2	23 2	24 2	27 2

1053 天喜 1	1054 天喜 2	1055 天喜 3	1056 天喜 4	1057 天喜 5	1058 康平 1	1059 康平 2	1060 康平 3
15 (0.68)	15 (0.68)	15 (0.68)	16 (0.70)	16 (0.67)	15 (0.65)	15 (0.63)	16 (0.64)
7 (0.32)	7 (0.32)	7 (0.32)	7 (0.30)	8 (0.33)	8 (0.35)	9 (0.38)	9 (0.36)
22 2	22 2	22 2	23 2	24 2	23 2	24 2	25 2

後冷泉

1045 寛徳 2	1046 永承 1	1047 永承 2	1048 永承 3	1049 永承 4	1050 永承 5	1051 永承 6	1052 永承 7
18(0.82)	18(0.82)	18(0.82)	18(0.78)	17(0.77)	17(0.74)	16(0.70)	15(0.68)
4 (0.18)	4 (0.18)	4 (0.18)	5 (0.22)	5 (0.23)	6 (0.26)	7 (0.30)	7 (0.32)
22 2	22 2	22 2	23 2	22 2	23 2	23 2	22 2

--

1037 長暦 1	1038 長暦 2	1039 長暦 3	1040 長久 1	1041 長久 2	1042 長久 3	1043 長久 4	1044 寛徳 1
18(0.82)	19(0.83)	20(0.83)	19(0.86)	19(0.86)	20(0.87)	21(0.84)	19(0.83)
4 (0.18)	4 (0.17)	4 (0.17)	3 (0.14)	3 (0.14)	3 (0.13)	4 (0.16)	4 (0.17)
22 2	23 2	24 2	22 2	22 2	23 2	25 2	23 2

							後朱雀
	藤原頼通						
1029 長元 2	1030 長元 3	1031 長元 4	1032 長元 5	1033 長元 6	1034 長元 7	1035 長元 8	1036 長元 9
18(0.82)	16(0.76)	17(0.77)	17(0.77)	17(0.77)	17(0.74)	18(0.78)	18(0.78)
4 (0.18)	5 (0.24)	5 (0.23)	5 (0.23)	5 (0.23)	6 (0.26)	5 (0.22)	5 (0.22)
22 2	21 2	22 2	22 2	22 2	23 2	23 2	23 2



藤原公季							
1021 治安 1	1022 治安 2	1023 治安 3	1024 万寿 1	1025 万寿 2	1026 万寿 3	1027 万寿 4	1028 長元 1
20 (0.91)	19 (0.90)	21 (0.88)	20 (0.91)	19 (0.90)	20 (0.87)	19 (0.86)	18 (0.86)
2 (0.09)	2 (0.10)	3 (0.13)	2 (0.09)	2 (0.10)	3 (0.13)	3 (0.14)	3 (0.14)
22 2	21 2	24 2	22 2	21 2	23 2	22 2	21 2

1

						藤原頼通	
1013 長和 2	1014 長和 3	1015 長和 4	1016 長和 5	1017 寛仁 1	1018 寛仁 2	1019 寛仁 3	1020 寛仁 4
19(0.83)	19(0.83)	19(0.79)	18(0.78)	20(0.83)	19(0.83)	19(0.83)	21(0.88)
4 (0.17)	4 (0.17)	4 (0.17)	4 (0.17)	4 (0.17)	4 (0.17)	4 (0.17)	3 (0.13)
		1 (0.04)	1 (0.04)				
23 2	23 2	24 3	23 3	24 2	23 2	23 2	24 2

	三条
--	----

1005 寛弘 2	1006 寛弘 3	1007 寛弘 4	1008 寛弘 5	1009 寛弘 6	1010 寛弘 7	1011 寛弘 8	1012 長和 1
15 (0.79)	15 (0.83)	15 (0.83)	17 (0.85)	18 (0.86)	17 (0.85)	18 (0.86)	17 (0.81)
2 (0.11)	2 (0.11)	2 (0.11)	2 (0.10)	3 (0.14)	3 (0.15)	3 (0.14)	4 (0.19)
1 (0.05)							
1 (0.05)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.05)				
19 4	18 3	18 3	20 3	21 2	20 2	21 2	21 2

997 長徳 3	998 長徳 4	999 長保 1	1000 長保 2	1001 長保 3	1002 長保 4	1003 長保 5	1004 寛弘 1
11 (0.69)	12 (0.71)	12 (0.75)	12 (0.75)	14 (0.78)	14 (0.82)	14 (0.82)	15 (0.83)
3 (0.19)	3 (0.18)	2 (0.13)	2 (0.13)	2 (0.11)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)
1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)
1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)
16 4	17 4	16 4	16 4	18 4	17 4	17 4	18 4



			花山	一条			
						藤原兼家	
981 天元 4	982 天元 5	983 永観 1	984 永観 2	985 寛和 1	986 寛和 2	987 永延 1	988 永延 2
10 (0.59)	10 (0.59)	11 (0.58)	11 (0.61)	12 (0.63)	14 (0.64)	13 (0.62)	15 (0.68)
6 (0.35)	6 (0.35)	6 (0.32)	6 (0.33)	6 (0.32)	7 (0.32)	7 (0.33)	7 (0.32)
		1 (0.05)					
1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.05)	1 (0.06)	1 (0.05)	1 (0.05)	1 (0.05)	
17 3	17 3	19 4	18 3	19 3	22 3	21 3	22 2

藤原兼通					藤原頼忠		
973 天延 1	974 天延 2	975 天延 3	976 貞元 1	977 貞元 2	978 天元 1	979 天元 2	980 天元 3
11 (0.61)	10 (0.56)	10 (0.56)	10 (0.56)	10 (0.56)	10 (0.59)	10 (0.59)	10 (0.59)
7 (0.39)	8 (0.44)	8 (0.44)	8 (0.44)	8 (0.44)	7 (0.41)	7 (0.41)	7 (0.41)
18 2	18 2	18 2	18 2	18 2	17 2	17 2	17 2

		冷泉		円融			
						藤原伊尹	
965 康保 2	966 康保 3	967 康保 4	968 安和 1	969 安和 2	970 天禄 1	971 天禄 2	972 天禄 3
9 (0.56)	8 (0.50)	10 (0.56)	9 (0.56)	11 (0.61)	12 (0.63)	9 (0.56)	11 (0.61)
5 (0.31)	6 (0.38)	6 (0.33)	6 (0.38)	6 (0.33)	6 (0.32)	6 (0.38)	6 (0.33)
1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.05)	1 (0.06)	1 (0.06)
1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)					
		</					



957 天德 1	958 天德 2	959 天德 3	960 天德 4	961 応和 1	962 応和 2	963 応和 3	964 康保 1
8 (0.50)	10 (0.53)	10 (0.63)	10 (0.59)	9 (0.56)	9 (0.56)	10 (0.59)	10 (0.59)
5 (0.31)	6 (0.32)	3 (0.19)	4 (0.24)	4 (0.25)	4 (0.25)	4 (0.24)	5 (0.29)
	1 (0.05)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)
1 (0.06)	1 (0.05)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)
2 (0.13)	1 (0.05)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	
16 4	19 5	16 5	17 5	16 5	16 5	17 5	17 4

藤原実頼							
949 天曆 3	950 天曆 4	951 天曆 5	952 天曆 6	953 天曆 7	954 天曆 8	955 天曆 9	956 天曆10
8 (0.50)	7 (0.44)	7 (0.44)	8 (0.50)	8 (0.47)	7 (0.44)	8 (0.47)	8 (0.50)
5 (0.31)	5 (0.31)	6 (0.38)	5 (0.31)	5 (0.29)	6 (0.38)	6 (0.35)	5 (0.31)
1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)
1 (0.06)	1 (0.06)						
1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)			
	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.06)	2 (0.12)	2 (0.13)	2 (0.12)	2 (0.13)
16 5	16 6	16 5	16 5	17 5	16 4	17 4	16 4

	村上
--	----

941 天慶 4	942 天慶 5	943 天慶 6	944 天慶 7	945 天慶 8	946 天慶 9	947 天曆 1	948 天曆 2
10 (0.59)	9 (0.64)	9 (0.64)	9 (0.60)	10 (0.63)	9 (0.64)	9 (0.56)	8 (0.50)
5 (0.29)	4 (0.29)	4 (0.29)	5 (0.33)	5 (0.31)	4 (0.29)	5 (0.31)	5 (0.31)
1 (0.06)							
						1 (0.06)	1 (0.06)
1 (0.06)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.06)	1 (0.07)	1 (0.06)	1 (0.06)
							1 (0.06)
17 4	14 3	14 3	15 3	16 3	14 3	16 4	16 5

933 承平 3	934 承平 4	935 承平 5	936 承平 6	937 承平 7	938 天慶 1	939 天慶 2	940 天慶 3
9 (0.69)	9 (0.60)	9 (0.60)	9 (0.60)	9 (0.60)	9 (0.60)	9 (0.56)	9 (0.64)
1 (0.08)	2 (0.13)	2 (0.13)	2 (0.13)	2 (0.13)	2 (0.13)	3 (0.19)	3 (0.21)
1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.06)	1 (0.07)
	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.06)	
						1 (0.06)	1 (0.07)
2 (0.15)	2 (0.13)	2 (0.13)	2 (0.13)	2 (0.13)	2 (0.13)	1 (0.06)	
13 4	15 5	15 5	15 5	15 5	15 5	16 6	14 4

	朱雀
--	----

925 延長 3	926 延長 4	927 延長 5	928 延長 6	929 延長 7	930 延長 8	931 承平 1	932 承平 2
11 (0.79)	11 (0.85)	11 (0.73)	11 (0.73)	11 (0.73)	11 (0.69)	11 (0.73)	11 (0.73)
2 (0.14)	2 (0.15)	2 (0.13)	2 (0.13)	2 (0.13)	2 (0.13)	1 (0.07)	1 (0.07)
1 (0.07)		1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.06)	1 (0.07)	1 (0.07)
		1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	2 (0.13)	2 (0.13)	2 (0.13)
14 3	13 2	15 4	15 4	15 4	16 4	15 4	15 4

917 延喜17	918 延喜18	919 延喜19	920 延喜20	921 延喜21	922 延喜22	923 延長 1	924 延長 2
9 (0.64)	7 (0.58)	8 (0.62)	8 (0.62)	9 (0.75)	9 (0.82)	12 (0.86)	11 (0.85)
2 (0.14)	2 (0.17)	2 (0.15)	2 (0.15)	2 (0.17)	1 (0.09)	1 (0.07)	1 (0.08)
1 (0.07)	1 (0.08)	2 (0.15)	2 (0.15)	1 (0.08)	1 (0.09)	1 (0.07)	1 (0.08)
1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.08)	1 (0.08)				
1 (0.07)	1 (0.08)						
14 5	12 5	13 4	13 4	12 3	11 3	14 3	13 3

	源光				藤原忠平		
909 延喜 9	910 延喜10	911 延喜11	912 延喜12	913 延喜13	914 延喜14	915 延喜15	916 延喜16
7 (0.50)	7 (0.54)	8 (0.57)	8 (0.57)	9 (0.60)	10 (0.67)	10 (0.71)	9 (0.69)
1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.08)
3 (0.21)	3 (0.23)	4 (0.29)	4 (0.29)	4 (0.27)	3 (0.20)	2 (0.14)	2 (0.15)
				1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.08)
1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.07)				
1 (0.07)							
1 (0.07)	1 (0.08)						
14 6	13 5	14 4	14 4	15 4	15 4	14 4	13 4

901 延喜 1	902 延喜 2	903 延喜 3	904 延喜 4	905 延喜 5	906 延喜 6	907 延喜 7	908 延喜 8
6 (0.43)	6 (0.40)	6 (0.43)	6 (0.43)	6 (0.43)	6 (0.43)	5 (0.38)	7 (0.47)
1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.07)
5 (0.36)	5 (0.33)	4 (0.29)	4 (0.29)	4 (0.29)	4 (0.29)	4 (0.31)	4 (0.27)
	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.07)
	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.07)
1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.07)
1 (0.07)							
14 5	15 6	14 6	14 6	14 6	14 6	13 6	15 6



				醍醐			
			藤原良世	源 能有	藤原時平		
893 寛平 5	894 寛平 6	895 寛平 7	896 寛平 8	897 寛平 9	898 昌泰 1	899 昌泰 2	900 昌泰 3
7 (0.50)	7 (0.50)	8 (0.47)	6 (0.43)	5 (0.36)	5 (0.38)	6 (0.43)	8 (0.50)
				1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.06)
6 (0.43)	6 (0.43)	8 (0.47)	7 (0.50)	7 (0.50)	6 (0.46)	6 (0.43)	5 (0.31)
							1 (0.06)
1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.06)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.06)
14 3	14 3	17 3	14 3	14 4	13 4	14 4	16 5

							宇多
							源融
885 仁和 1	886 仁和 2	887 仁和 3	888 仁和 4	889 寛平 1	890 寛平 2	891 寛平 3	892 寛平 4
7 (0.47)	7 (0.44)	7 (0.44)	6 (0.43)	5 (0.42)	5 (0.42)	6 (0.50)	6 (0.60)
6 (0.40)	7 (0.44)	7 (0.44)	7 (0.50)	6 (0.50)	6 (0.50)	6 (0.50)	4 (0.40)
1 (0.07)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.08)		
1 (0.07)	1 (0.06)	1 (0.06)					
15 4	16 4	16 4	14 3	12 3	12 3	12 2	10 2

							光孝
			藤原基經				
877 元慶 1	878 元慶 2	879 元慶 3	880 元慶 4	881 元慶 5	882 元慶 6	883 元慶 7	884 元慶 8
4 (0.31)	3 (0.30)	5 (0.38)	5 (0.38)	5 (0.42)	7 (0.54)	7 (0.54)	7 (0.44)
		1 (0.08)	1 (0.08)	1 (0.08)	1 (0.08)	1 (0.08)	1 (0.06)
1 (0.08)							
5 (0.38)	5 (0.50)	5 (0.38)	5 (0.38)	5 (0.42)	4 (0.31)	4 (0.31)	6 (0.38)
							1 (0.06)
1 (0.08)							
1 (0.08)	1 (0.10)	1 (0.08)	1 (0.08)	1 (0.08)	1 (0.08)	1 (0.08)	1 (0.06)
1 (0.08)	1 (0.10)	1 (0.08)	1 (0.08)				
13 6	10 4	13 5	13 5	12 4	13 4	13 4	16 5

							陽成
				源融			
869 貞觀11	870 貞觀12	871 貞觀13	872 貞觀14	873 貞觀15	874 貞觀16	875 貞觀17	876 貞觀18
5 (0.45)	6 (0.43)	7 (0.50)	8 (0.47)	6 (0.43)	6 (0.43)	6 (0.40)	4 (0.31)
1 (0.09)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.06)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.08)
3 (0.27)	4 (0.29)	4 (0.29)	5 (0.29)	4 (0.29)	4 (0.29)	5 (0.33)	5 (0.38)
1 (0.09)	1 (0.07)						
1 (0.09)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.06)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.08)
	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.06)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.08)
			1 (0.06)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.08)
11 5	14 6	14 5	17 6	14 6	14 6	15 6	13 6

861 貞観 3	862 貞観 4	863 貞観 5	864 貞観 6	865 貞観 7	866 貞観 8	867 貞観 9	868 貞観10
4 (0.29)	4 (0.31)	4 (0.31)	6 (0.40)	6 (0.40)	6 (0.40)	6 (0.43)	5 (0.42)
1 (0.07)							
1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.08)					
			1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.08)
5 (0.36)	5 (0.38)	5 (0.38)	4 (0.27)	4 (0.27)	4 (0.27)	4 (0.29)	4 (0.33)
1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)		
1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	
1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.08)
			1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.08)
14 7	13 6	13 6	15 7	15 7	15 7	14 6	12 5

					清和		
		藤原良房					
853 仁寿 3	854 斉衡 1	855 斉衡 2	856 斉衡 3	857 天安 1	858 天安 2	859 貞観 1	860 貞観 2
6 (0.43)	5 (0.36)	5 (0.38)	5 (0.36)	4 (0.31)	5 (0.36)	5 (0.33)	4 (0.29)
						1 (0.07)	1 (0.07)
4 (0.29)	5 (0.36)	4 (0.31)	5 (0.36)	5 (0.38)	5 (0.36)	5 (0.33)	5 (0.36)
1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)
1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.07)	
1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)
1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)
							1 (0.07)
14 6	14 6	13 6	14 6	13 6	14 6	15 7	14 7

	文德
--	----

845 承和12	846 承和13	847 承和14	848 嘉祥 1	849 嘉祥 2	850 嘉祥 3	851 仁寿 1	852 仁寿 2
3 (0.25)	3 (0.25)	3 (0.25)	4 (0.33)	4 (0.29)	4 (0.29)	5 (0.33)	5 (0.33)
1 (0.08)	1 (0.08)						
3 (0.25)	3 (0.25)	4 (0.33)	3 (0.25)	5 (0.36)	5 (0.36)	4 (0.27)	4 (0.27)
2 (0.17)	2 (0.17)	2 (0.17)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)
1 (0.08)	1 (0.08)	1 (0.08)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)
1 (0.08)	1 (0.08)						
1 (0.08)	1 (0.08)	1 (0.08)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)
		1 (0.08)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)
			1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)
						1 (0.07)	1 (0.07)
12 7	12 7	12 6	12 7	14 7	14 7	15 8	15 8

							源常
837 承和 4	838 承和 5	839 承和 6	840 承和 7	841 承和 8	842 承和 9	843 承和10	844 承和11
6 (0.43)	6 (0.43)	6 (0.43)	6 (0.38)	4 (0.31)	4 (0.27)	3 (0.23)	3 (0.25)
1 (0.07)							
			1 (0.06)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.08)
1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.06)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.08)	
1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.06)	1 (0.08)	1 (0.07)		
3 (0.21)	3 (0.21)	3 (0.21)	3 (0.19)	2 (0.15)	3 (0.20)	3 (0.23)	3 (0.25)
1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.06)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.08)	2 (0.17)
1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.06)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.08)	
	1 (0.07)	1 (0.07)	1 (0.06)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.08)
			1 (0.06)	1 (0.08)	1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.08)
					1 (0.07)	1 (0.08)	1 (0.08)
14 7	14 7	14 7	16 9	13 9	15 10	13 9	12 7



〔備考〕氏族の列举順は参議補任年次順に拠る。各年次における数値は参議以上者数、括弧内数値は「参議以上者年次比率」をそれぞれ示し、合計員数欄の括弧内数値は、下が全合計員数に占める百分比、横が年平均員数をそれぞれ示す。

末尾付載表（一）

天 皇 首 班 者 年 次 氏 族	淳和		仁明			
	藤原緒嗣					
	831 天長 8	832 天長 9	833 天長10	834 承和 1	835 承和 2	836 承和 3
藤 原	5 (0.42)	5 (0.38)	5 (0.31)	6 (0.38)	6 (0.40)	6 (0.40)
清 原	2 (0.17)	2 (0.15)	2 (0.13)	2 (0.13)	1 (0.07)	1 (0.07)
皇 親	1 (0.08)	1 (0.08)	1 (0.06)	1 (0.06)		
南 淵	1 (0.08)	1 (0.08)	1 (0.06)			
三 原	1 (0.08)	1 (0.08)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.07)	1 (0.07)
文 室	1 (0.08)	1 (0.08)	1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.07)	1 (0.07)
源	1 (0.08)	2 (0.15)	3 (0.19)	3 (0.19)	3 (0.20)	3 (0.20)
橘			1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.07)	1 (0.07)
朝 野			1 (0.06)	1 (0.06)	1 (0.07)	1 (0.07)
紀					1 (0.07)	1 (0.07)
安 倍						
和 気						
滋 野						
小 野						
大 伴						
平						
春 澄						
大 江						
在 原						
菅 原						
良 峰						
三 善						
合計数 氏族数	12 7	13 7	16 9	16 8	15 8	15 8

文治一(二八五)	文治二(二八六)	文治三(二八七)	文治四(二八八)
定房	定房	定房	定房
村上	村上	村上	村上

文治五(二八九)	建久一(二九〇)	建久二(二九一)	建久三(二九二)
通親	頼朝	通親	通親
村上	清和	村上	村上







万寿二(一〇三三)	万寿三(一〇三四)	万寿四(一〇三五)	長元一(一〇三八)	長元二(一〇三九)	長元三(一〇四〇)	長元四(一〇四一)	長元五(一〇四二)	長元六(一〇四三)	長元七(一〇四四)	長元八(一〇四五)	長元九(一〇四六)	長曆一(一〇三七)	長曆二(一〇三八)	長曆三(一〇三九)	長久一(一〇四〇)	長久二(一〇四一)	長久三(一〇四二)	長久四(一〇四三)	寛徳一(一〇四四)
道方	道方	道方	道方	道方	道方	道方	道方	道方	道方	師房	師房	師房	師房	師房	師房	師房	師房	師房	師房
宇多	宇多	宇多	宇多	宇多	宇多	宇多	宇多	宇多	宇多	村上	村上	村上	村上	村上	村上	村上	村上	村上	村上

寛徳二(一〇四五)	永承一(一〇四六)	永承二(一〇四七)	永承三(一〇四八)	永承四(一〇四九)	永承五(一〇五〇)	永承六(一〇五一)	永承七(一〇五二)	天喜一(一〇五三)	天喜二(一〇五四)	天喜三(一〇五五)	天喜四(一〇五六)	天喜五(一〇五七)	康平一(一〇五八)	康平二(一〇五九)	康平三(一〇六〇)	康平四(一〇六一)	康平五(一〇六二)	康平六(一〇六三)	康平七(一〇六四)
師房	師房	師房	師房	師房	師房	師房	師房	師房	師房	師房	師房	師房	師房	師房	師房	師房	師房	師房	師房
村上	村上	村上	村上	村上	村上	村上	村上	村上	村上	村上	村上	村上	村上	村上	村上	村上	村上	村上	村上



天慶八(九四)	天慶九(九四)	天曆一(九七)	天曆二(九八)	天曆三(九八)	天曆四(九五)	天曆五(九五)	天曆六(九五)	天曆七(九五)	天曆八(九四)	天曆九(九四)	天曆一〇(九五)	天德一(九五)	天德二(九五)	天德三(九五)	天德四(九六)	応和一(九六)	応和二(九六)	康保一(九四)
清蔭	清蔭	清蔭	清蔭	清蔭	清蔭	高明	高明	高明	高明	高明	高明	高明	高明	高明	高明	高明	高明	高明
陽成	陽成	陽成	陽成	陽成	陽成	醍醐	醍醐	醍醐	醍醐	醍醐	醍醐	醍醐	醍醐	醍醐	醍醐	醍醐	醍醐	醍醐

	</																		







〔備考〕年次欄中の●印付加は、廟堂の首班者たるの地位にあった年次を示す。従って当該年次の人物が●印付加者ということになる。

末尾付載表（二）

太政大臣																	
左大臣																	
右大臣																	
内大臣																	
大納言																	
中納言																	
参議																	
年次	天長八（八三二）	天長九（八三三）	天長一〇（八三四）	承和一（八三五）	承和二（八三六）	承和三（八三七）	承和四（八三八）	承和五（八三九）	承和六（八四〇）	承和七（八四一）	承和八（八四二）	承和九（八四三）	承和一〇（八四四）	●承和二（八四五）	●承和三（八四六）	●承和四（八四七）	●承和五（八四八）
人名	信	常	常	常	常	常	常	常	常	常	常	常	常	常	常	常	常
所属	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨

太政大臣																	
左大臣																	
右大臣																	
内大臣																	
大納言																	
中納言																	
参議																	
年次	●嘉祥一（八四八）	●嘉祥二（八四九）	●嘉祥三（八五〇）	●仁寿一（八五一）	●仁寿二（八五二）	●仁寿三（八五三）	●齐衡一（八五四）	齐衡二（八五五）	齐衡三（八五六）	天安一（八五七）	天安二（八五八）	貞観一（八五九）	貞観二（八六〇）	貞観三（八六一）	貞観四（八六二）	貞観五（八六三）	貞観六（八六四）
人名	常	常	常	常	常	常	常	信	信	信	信	信	信	信	信	信	信
所属	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨	嵯峨